

# 上罐子遺跡群

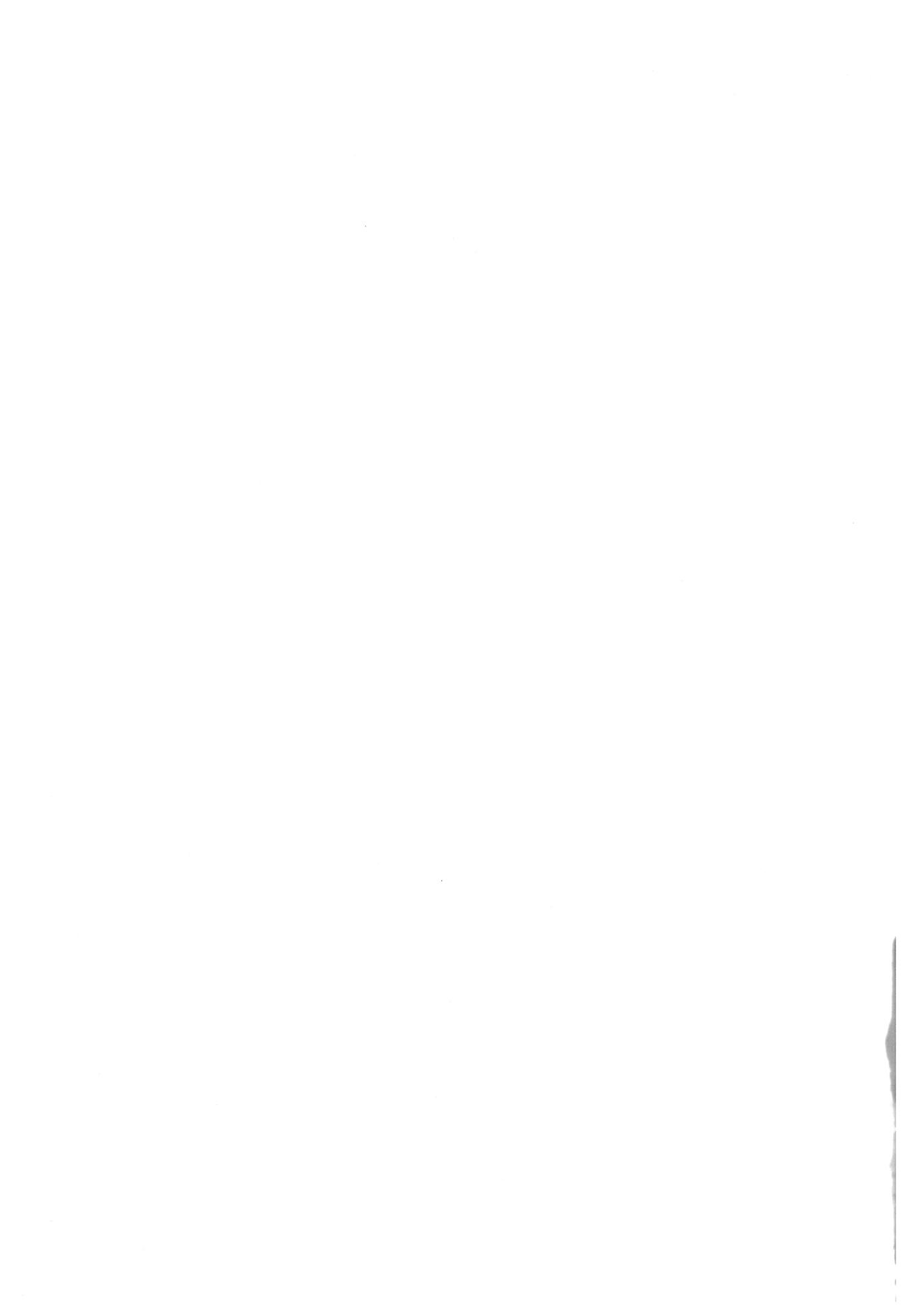
福岡県糸島郡前原町大字有田字上罐子所在遺跡調査報告

前原町文化財調査報告書

第 3 集

1980

前原町教育委員会





## 序 文

本町は、わが国の中で最も早く開けた地であり、埋蔵文化財が数多く存在することが確認されています。近年、人口増加が著しく、これに伴う宅地の開発や農業基盤の整備等が非常に多く行われるようになりました。

これらの開発と文化財保護との調整を図りつつ後世の人々に伝えていくことは、われわれの大きな課題だといえます。

この報告は、文化財に対して、深い御理解を持っておられる株式会社九州住宅流通サービスからの委託事業として発掘調査を行ったものです。

遺跡の所在地は、福岡県糸島郡前原町大字有田字上罐子にあり、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土壙・柵列等の弥生時代後期から古墳時代期にわたる遺跡が確認されました。

本報告が研究資料の一つとして御活用いただければ幸いに存じます。

なお、調査にあたって御協力くださった地元の方々や、調査の補助に進んで御努力いただいた福岡大学学生の新開・久原氏や樺木氏、さらに、クラブ活動の一環としてお骨折りをおかけした糸島高校郷土部・城南高校郷土研究部の生徒のみなさんに深く謝意を表します。

前原町教育委員会  
教育長 豊 島 禮 蔵

## 例　　言

1. この報告は、福岡県糸島郡前原町大字有田字上罐子所在の上罐子遺跡第3次調査の調査報告である。
2. 発掘調査・整理作業は、株式会社九州住宅流通サービスの協力を得、前原町教育委員会が実施した。
3. 本書の遺構実測は、川村博・樋木弘明・新開誉之・久原政基があり、遺物実測等の整理作業は、川村がおこない、挿図製図には、那珂川町委員会澤田康夫氏の協力を得た。
4. 本書の執筆・編集は川村がおこなった。

# 本文目次

I 調査への経過.....	1
II 位置と環境.....	2
III 遺構と遺物.....	6
(1) 調査区設定の経過・方法.....	6
(2) 遺構.....	6
概要.....	6
柵列(柱穴列).....	6
住居跡.....	12
掘立柱建物.....	21
土壙.....	22
溝.....	24
不明遺構.....	26
(3) 遺物.....	27
柵列(柱穴列)出土土器.....	27
住居跡出土土器.....	27
土壙出土土器.....	40
溝内出土土器.....	44
不明遺構出土土器.....	46
柱穴内出土土器.....	50
S :35 ; E :05地区2・3層出土土器.....	51
農工具.....	52
漁具.....	53
紡織具.....	54
装身具.....	54
武器.....	55
IV まとめ.....	56
住居跡の時期と立地について.....	56
弥生時代住居跡の形態について.....	56
古墳時代住居跡の形態について.....	59
溝と住居跡との関係について.....	59

掘立柱建物について	59
砥石・工作台を有する住居跡について	59
赤焼き土器について	59

## 図 版 目 次

- 図版 1 〔上〕 上罐子遺跡群近景（東より）  
           〔下〕 同 上
- 図版 2 〔上〕 上罐子遺跡群近景（東より）  
           〔下〕 同 上
- 図版 3 〔上〕 上罐子遺跡群近景（東より）  
           〔下〕 同 上
- 図版 4 〔上〕 S B 19・S B13付近住居跡群遠景（東より）  
           〔下〕 同 上 近景（東より）
- 図版 5 〔上〕 S B 44・S B 45付近遺構群遠景（東より）  
           〔下〕 同 上 近景（東より）
- 図版 6 〔上〕 S B 19住居跡群近景（南より）  
           〔下〕 S B 01・S B 06（北より）
- 図版 7 〔上〕 S B 05（西より）  
           〔下〕 S B 07（東より）
- 図版 8 〔上〕 S B 08～S B 10（東より）  
           〔下〕 S B 16（西より）
- 図版 9 〔上〕 S B 20（東より）  
           〔下〕 S B 20土器出土状況（東より）
- 図版 10 〔上〕 同 上  
           〔下〕 同 上
- 図版 11 〔上〕 S B 29・S B 30住居跡群付近（東より）  
           〔下〕 S B 30（東より）
- 図版 12 〔上〕 S B 23（東より）  
           〔下〕 S B 28・S B 29（東より）
- 図版 13 〔上〕 S B 25・S B 26付近住居跡群（東より）  
           〔下〕 S B 47・S K 06付近遺構群（東より）
- 図版 14 〔上〕 S B 33付近遺構群（東より）

- 〔下〕 S B 31～S B 33（東より）
- 図版15 〔上〕 S B51付近遺構群（東より）  
 〔下〕 S B51（東より）
- 図版16 〔上〕 S B55～S B 60付近遺構群（南より）  
 〔下〕 同 上 （北より）
- 図版17 〔上〕 S B 59付近（西より）  
 〔下〕 S B 59（西より）
- 図版18 〔上〕 S B 60（西より）  
 〔下〕 S B 59土器出土状況（東より）
- 図版19 〔上〕 S B 60土器出土状況（東より）  
 〔下〕 同 上 （東より）
- 図版20 〔上〕 S B 80～S B 82（東より）  
 〔下〕 S B 80（東より）
- 図版21 〔上〕 S B 88（東より）  
 〔下〕 S B 94（東より）
- 図版22 〔上〕 S K 04付近遺構群（東より）  
 〔下〕 S K 04近景（東より）
- 図版23 〔上〕 S K 01付近遺構群（東より）  
 〔下〕 S K 08（東より）
- 図版24 上罐子遺跡出土土器①
- 図版25 同 上 ②
- 図版26 同 上 ③
- 図版27 同 上 ④
- 図版28 同 上 ⑤
- 図版29 上罐子遺跡出土土器・鉄器・石器
- 図版30 上罐子遺跡出土石器・鉄器・玉類
- 図版31 上罐子遺跡出土砥石

## 挿 図 目 次

第1図	上罐子遺跡群位置図と周辺遺跡（1/50,000）	3
第2図	上罐子遺跡群付近地形図（1/2500）	4
第3図	S A 01・S B 94・S B 102実測図（1/80）	6～7

第4図	S A 02・S B 03・S B 100実測図 (1/80).....	7
第5図	S A 02・S B 100柱穴位置模式図 (1/200) .....	7
第6図	S B 01・S B 06実測図 (1/80) .....	7
第7図	S B 04実測図 (1/80) .....	12
第8図	S B 05実測図 (1/80) .....	13
第9図	S B 45～S B 50・S K 07実測図 (1/80) .....	16
第10図	S B 73・S B 101実測図 (1/80).....	18
第11図	S B 84～S B 86実測図 (1/80) .....	19
第12図	S B 88実測図 (1/80) .....	20
第13図	S B 95実測図 (1/80) .....	21
第14図	S B 101柱穴位置模式図 (1/200) .....	21
第15図	S K 04実測図 (1/80) .....	22
第16図	住居跡出土土器実測図① (1/4).....	30
第17図	同 上 ② (1/4).....	31
第18図	同 上 ③ (1/2).....	31
第19図	同 上 ④ (1/3).....	32
第20図	同 上 ⑤ (1/3).....	37
第21図	S K 08出土土器実測図 (1/2).....	41
第22図	土壤出土土器実測図① (1/4).....	41
第23図	土壤出土土器実測図② (1/3).....	42
第24図	溝内出土土器実測図 (1/4).....	45
第25図	不明遺構出土土器実測図① (1/4).....	46
第26図	不明遺構出土土器実測図② (1/3).....	48
第27図	S X 14出土土器実測図 (1/6).....	48
第28図	柱穴出土土器実測図① (1/4).....	49
第29図	同 上 ② (1/2).....	49
第30図	同 上 ③ (1/3).....	49
第31図	S : 35 ; E : 02地区 2層出土土器実測図① (1/4).....	50
第32図	同 上 ② (1/2).....	50
第33図	S : 35 ; E : 02地区 3層出土土器実測図 (1/3).....	51
第34図	S : 30; E : 05; E : 05地区 2層出土土器実測図① (1/3).....	51
第35図	鉄鋤先・鉄鍬先実測図 (1/2).....	52
第36図	石包丁・石鎌実測図 (1/2).....	52

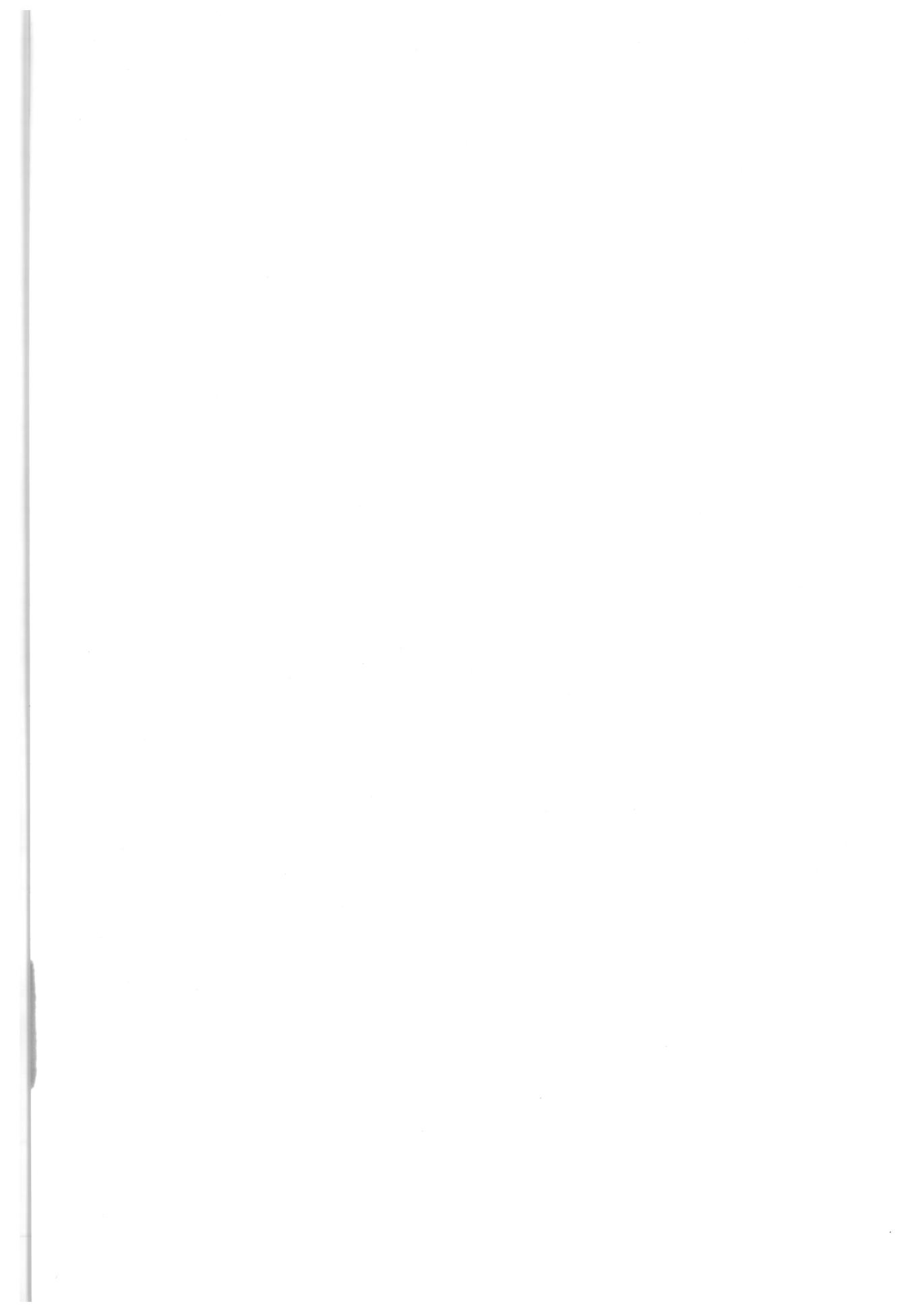
第37図	石錘実測図 (1/2).....	53
第38図	紡錘車実測図 (1/2).....	54
第39図	玉類実測図 (2/3).....	54
第40図	石戈・鉄劍実測図 (1/2).....	54
第41図	住居跡時期別配置図① (1/900).....	57
第42図	同 上 ② (1/900).....	58

## 表 目 次

第1表	上罐子遺跡群第3次調査過程表.....	2
第2表	S A 02・S B 100柱穴計測表 .....	7
第3表	住居跡一覧表①.....	8
第4表	同 上 ②.....	9
第5表	同 上 ③.....	10
第6表	同 上 ④.....	11
第7表	同 上 ⑤.....	12
第8表	S B 101柱穴計測表 .....	21
第9表	土壤一覧表.....	23
第10表	住居跡出土遺物一覧表①.....	28
第11表	同 上 ②.....	29

## 付 図 目 次

付図1	上罐子遺跡群（第3次）地形図 (1/600)
付図2	上罐子遺跡群（第3次）遺構配置図 (1/200)



# I 調査への経過

上罐子遺跡群は、福岡県糸島郡前原町大字有田字上罐子 757-6 他に所在する。

本遺跡群は、国道 202号線今宿バイパス建設予定路線内の遺跡として、昭和46（1971）年6・7月に第1次調査が、昭和47（1972）年12月より昭和48（1973）年2月までに第2次調査としておこなわれ、住居跡3軒・掘立柱建物2軒・溝状遺構2条・方形溝1条・土壙墓2基が調査<sup>（註1）</sup>されていた。

昭和54（1979）年6月に、株式会社九州住宅流通サービスより前原町役場都市計画課へ宅地分譲を開発目的とする開発計画事前審査願が提出された。よって、前原町教育委員会は、この地が埋蔵文化財包蔵地であることを開発計画事前審査会の際、事業主体者である株式会社九州住宅流通サービスに連絡し、数度の協議をもち、2回の予備試掘調査をおこなった。その結果、同社からの委託事業として、前原町教育委員会が発掘調査を昭和54年11月15日より昭和55年2月20日までおこない、その後、遺物整理等の作業をした。その過程は第1表のとおりである。

なお、発掘調査の組織・関係者は次のとおりである。

調査主体 前原町教育委員会

教育長 豊島 禮藏

社会教育課課長 野坂 雄英

同 主査 西 孝明

主事 岡本登美子

主事 川村 博〔調査担当〕

発掘調査の実施にあたっては、有田・高来寺・三雲行政区の方々には調査作業員として協力をいただき、樺木弘明・新開誉之（福岡大学2年）・久原政基（同大学1年）氏に調査・遺構実測等に協力をいただいた。また、調査時等に、福岡県教育委員会文化課課長藤井巧氏・調査第2係長栗原和彦氏・主任技師柳田康雄・橋口達也・中間研志各氏には指導を得、原田大六氏・県文化財保護指導員松吉俊実氏、糸島高校教諭内田坦氏には助言をいただき、糸島高校郷土部（部長 田中敦子）・城南高校郷土研究部からも参加の申込みがあり、調査に従事していただいた。

最後に、全面的に文化財保護行政の趣旨等をご理解いただいた株式会社九州住宅流通サービスに深く感謝いたします。

註1 栗原和志・上野精志他編 「上罐子遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告・第5集』

## II 位置と環境

上罐子遺跡群は、背振山山系を水源とする雷山川・多久川の間にある標高15.3~32.3mの丘陵上に立地する。

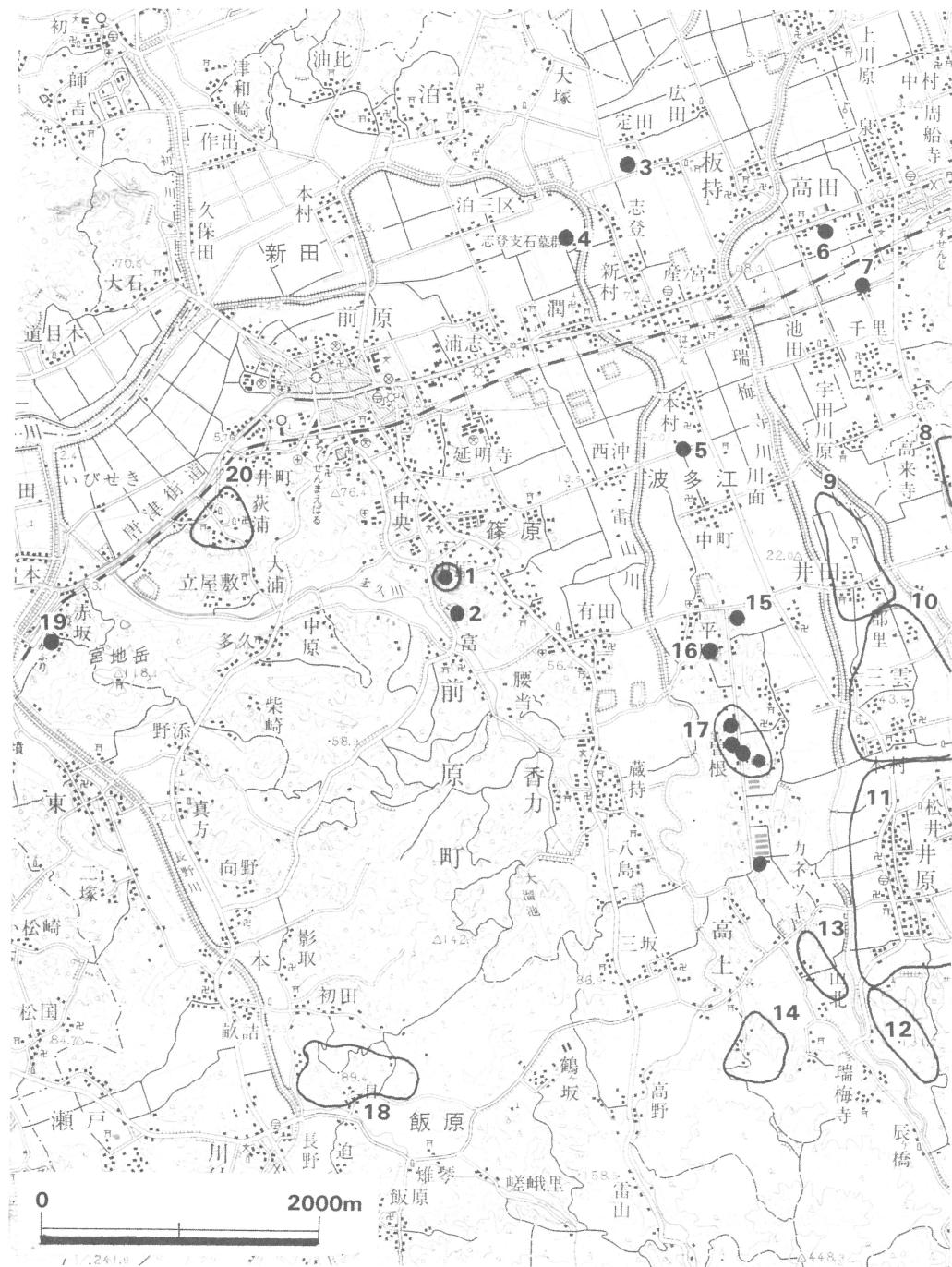
本遺跡群の周辺遺跡は、縄文時代後期より歴史時代にいたる種々の遺跡が存在するが、このことについては、坂元古墳群発掘調査報告書等に記述しているので、それ以外の主要な遺跡にとどめることにする。

福岡市西区大字千里シビナ所在の千里シビナ遺跡は、福岡市教育委員会文化課によって調査され、縄文時代後期の住居跡を検出し、三万田式土器などを出土している。<sup>(註2)</sup>

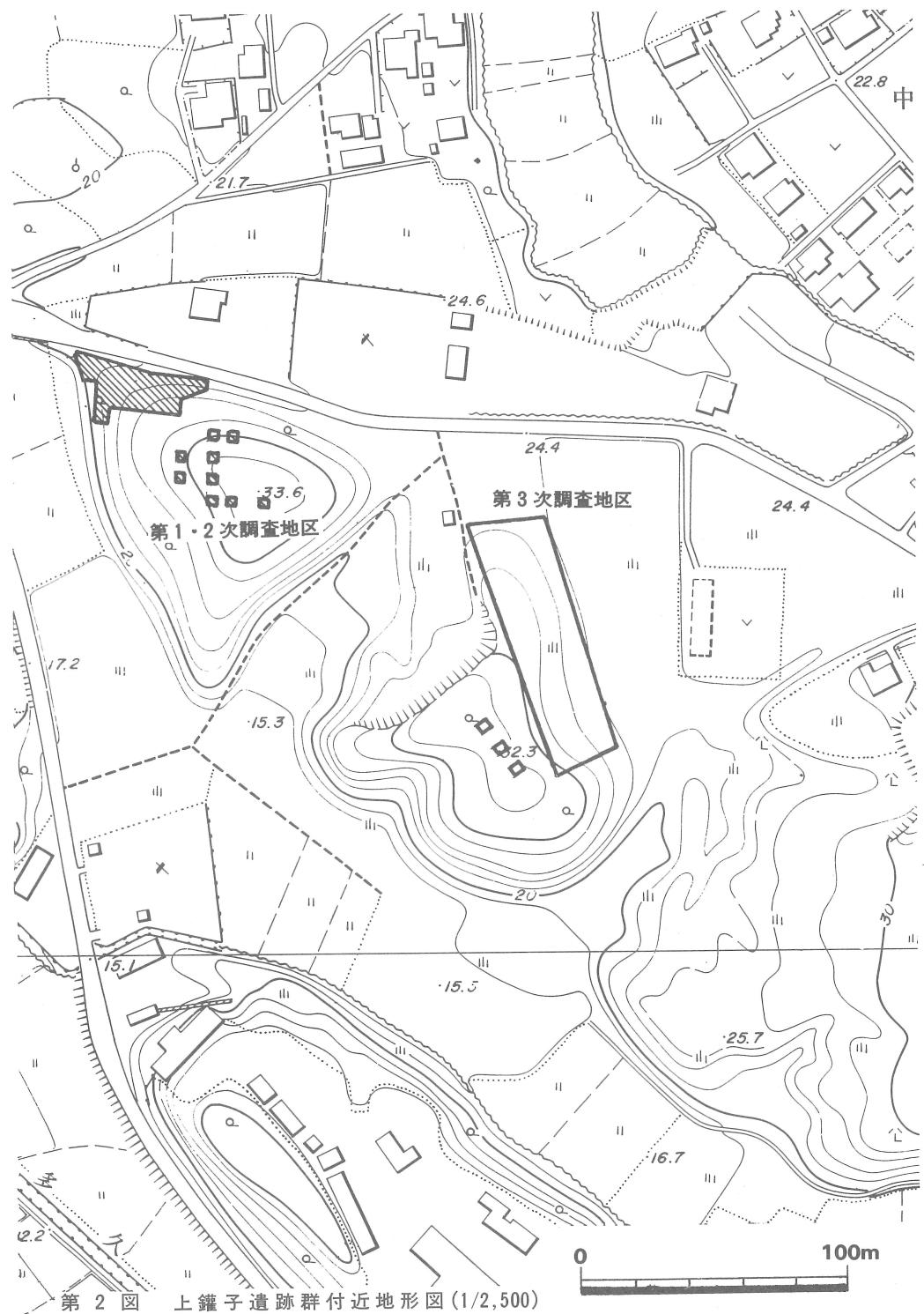
糸島郡前原町大字高田周辺の一丁田遺跡では縄文時代後期と推定される石斧を出土しており、千里シビナ遺跡と共に縄文時代期の遺跡の拡がりを確認しなければならない状況である。<sup>(註3)</sup>

また、大字井田には、井田用会支石墓が発見されており、磨製石鏃等を出土しており、志登支石墓群・三雲遺跡群の郡でも、同様な磨製石鏃を出土している。<sup>(註4)</sup>

井原地区にあっては、奈良時代末よりの遺構が存在し、さらに、弥生~歴史時代の生活・墳墓遺構があると考えられる。<sup>(註5)</sup>



第1図 上罐子遺跡群位置図と周辺遺跡 (1/50,000)



上罐子遺跡群付近地形図 (1/2,500)

泊・大塚地区では、詳細な規模等は不明であるが、前方後円墳が数基立地しており、割合に古式の様相をもつものと考えられ、鑑鏡を出土した古墳も存在する。<sup>(註8)</sup>

長野・日明地区では、盟主的な立地と考えられる前方後円墳や、10数基の円墳が存在する。<sup>(註9)</sup>

二塚地区では、東京国立博物館に所蔵されているガラス製二塚古墳や数基の低墳丘墓の方形墳を確認されている。

加布里地区では、古式の横穴式石室を主体部とする釜塚古墳が存在し、昭和47年に調査がおこなわれている。

上述の以外の周辺遺跡には、糸島郡二丈町一貴山所在の銚子塚古墳があり、福岡市西区金武では、装飾古墳が調査されている。

註1 川村 博編『坂元古墳群』 前原町教育委員会 1980

同 編『正恵古墳群』 前原町教育委員会 1980

2 塩谷勝利・田中寿夫編『千里シビナ遺跡』 福岡市教育委員会 1980

3 原田大六監修『前原町文化財地名表』 前原町教育委員会

4 註3と同じ

5 斎藤 忠編『志登支石墓群』 文化財保護委員会

6 柳田康雄編『三雲遺跡 I』 福岡県教育委員会 1980

7 昭和54年度正恵古墳群発掘調査の際、周辺遺跡の踏査の結果より

8 註3と同じ

9 同 上

### III 遺構と遺物

#### (1) 調査区設定の経過・方法

上罐子遺跡群の第3次調査では、第1・2次調査の結果を考慮し、また、現地踏査等の結果にもとづいて、丘陵の東側に、試掘溝を設定して、その地区に調査区を設定した。さらに、丘陵上には、調査時、遺構実測等と並行して、3ヵ所に $4 \times 4\text{ m}$ のグリッド調査をおこなった。その結果、丘陵上には、若干の弥生土器片を出土したが、細片で磨滅しており、第1次・第2次調査の結果と同様に、頸著な遺構は検出しえなかった。土壌等の流失と考えられる土層でもなく、表層下には黄褐色粘質土の地山であった。

また、町道上罐子・向坂線に隣接し、第1・2次調査と第3次調査の間に防火用水槽が、調査中に建設されることになり、施工業者の協力を得て、その建設予定地を重機で丁寧に計画の深さまで掘下げていただいたが、地山である黄褐色粘質土中には、先土器時代の遺構・遺物は検出しえなかった。

前述した経過を踏まえ、調査区を設定し、調査区を縦走し、磁北を基準とする南北軸を定め、その軸上の北側（調査区の北側）に、基準杭（O : 00 ; O : 00）を置き、5m四方の小調査区を設定し、地区杭を打ち、東西南北方向にE W N Sを付し、距離を示すようにした。例えば、基準杭（O : 00 ; O : 00）より南へ20m・東へ10mの場合、S : 20 ; E : 10として、調査・整理に対応できるように設定し、調査を開始した。

#### (2) 遺構

##### 概要

上罐子遺跡群の第3次調査では、標高約21~30mの間に、柵列2条・住居跡99軒・掘立柱建物4棟・溝13条・土壙22基・不明遺構22ヶ所を検出した。

遺跡は、丘陵の東側斜面に立地するため、土壌等の流失が著しく、特にS : 20 ; O : 00付近よりS : 30 ; W : 05の間は極立っていて、層位の逆転が認められた。

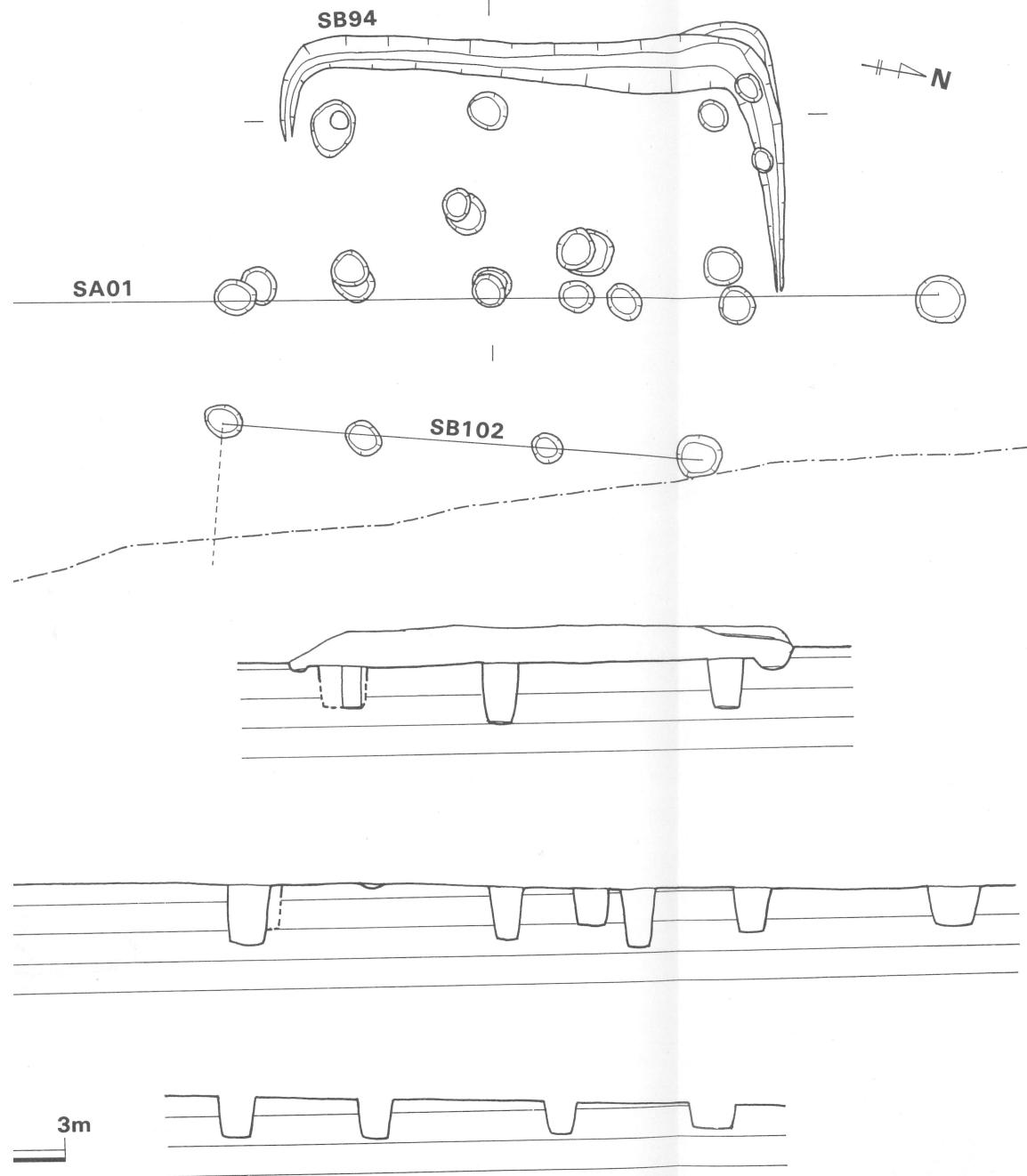
よって、一般的に、住居跡・溝・土壙等の東側は崩壊しているため、遺構の全容を知りえるものは数少ない。

なお、住居跡・土壙は第3~7表・第8表に形態・規模等をあらわしている。

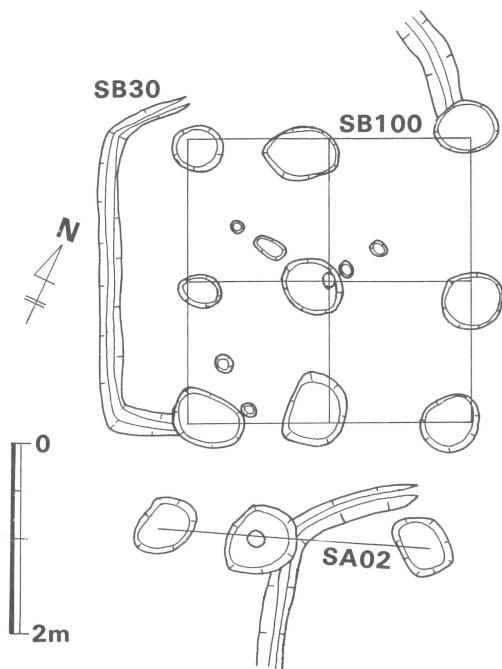
##### 柵列（柱穴列）

###### S A 01 (第3図)

発掘区南側に位置し、柱間約 $2.875\text{ m}$ を測る4間の柱列である。柱穴の中で南側で径 $14\text{ m}$ の柱痕を検出できた。



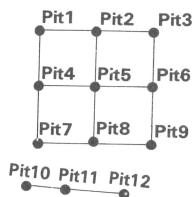
第3図 SA01・SB94・SB102 実測図 (1/80)



第4図 SA02・SB30・SB100実測図(1/80)

柱穴番号	大きさ		深さ	柱痕の径	
	東西×南北				
Pit 1	54	×	50	72	—
Pit 2	83	×	58	70	—
Pit 3	69	×	56	65	—
Pit 4	49	×	36	69	—
Pit 5	64	×	60	65	—
Pit 6	65	×	61	61	14
Pit 7	76	×	59	67	—
Pit 8	66	×	80	63	—
Pit 9	64	×	62	58	—
Pit 10	60	×	60	61	—
Pit 11	66	×	73	58	18
Pit 12	61	×	64	58	—

第2表 SA02・SB100柱穴計測表 (単位: cm)

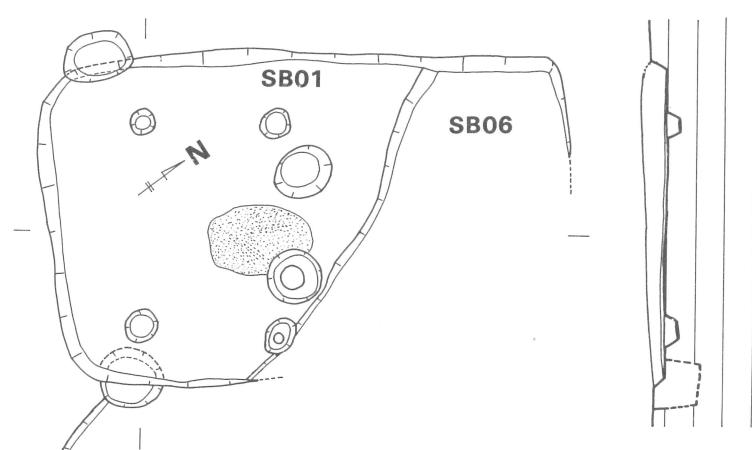


第5図  
SA02・SB100  
柱穴位置模式図(1/200)

SA02 (第4・  
5図・第8表)

S : 15 ; E : 15

付近で検出した2  
間の柱列で1個の  
柱穴で柱痕を検出  
できた。



第6図 SB01・SB06 実測図 (1/80)

	規 模 (m)	形態	主柱穴の数 ・大きさ(cm)	炉 火	カマド 火	ベッド カマド	の有無	貯蔵穴	時 期	備 考
SB01	$3.39 \times (3.9 + \alpha)$	方形	$4 + \alpha \cdot 41$	有	—	—	—	—	弥・後・中	SB06より新しい
SB02	$(1.5 + \alpha) \times (1.18 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	—	?	
SB03	$(1.26 + \alpha) \times (0.25 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB01より古い 須恵器混入
SB04	$2.78 \times (1.26 + \alpha)$	方形	—	—	—	西側	—	—	弥・後・後半	SB03より新しい
SB05	$4.45 \times (4.3 + \alpha)$	方形	$4 + \alpha \cdot \text{約}75$	有	—	—	—	—	弥・後・初	周溝がめぐる
SB06	$(3.56 + \alpha) \times (1.9 + \alpha)$	方形	$3 + \alpha \cdot 33$	—	—	—	—	—	?	SB01より古い
SB07	$(2.7 + \alpha) \times (1.83 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	—	弥・後・前半	
SB08	$3.3 + (0.9 + \alpha)$	方形	—	—	?	—	—	—	古・後	SB09・SB10よ り新しい
SB09	—	方形?	—	—	?	—	—	—	古・後	SB08より古く, SB10より新しい
SB10	—	方形	—	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB08・SB09よ り古い
SB11a	$3.5 \times (2.28 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB11bより古い
SB11b	$(2.75 + \alpha) \times (0.4 + \alpha)$	方形	—	—	?	—	—	—	古・後	SB11aより新し い。弥生混入
SB12	$2.96 \times (1.42 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	—	古・後	SB11bより古い
SB13	$3.22 \times (1.35 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	—	?	SB12より新しい
SB14	$(2.7 + \alpha) \times (1.54 + \alpha)$	方形	—	有	—	—	—	—	弥・後・初	SB15・SK01よ り古い
SB15	$(3.74 + \alpha) \times (1.2 + \alpha)$	方形	—	—	?	—	—	—	弥・後・前	SB14より新しい
SB16	$(4.26 + \alpha) \times (24 \times \alpha)$	不整形	2 · 約30	—	?	—	—	—	古・後	
SB17	$(2.78 + \alpha) \times (3.1 + \alpha)$	不整形	—	—	?	西側?	—	—	古・後	SB18より古い
SB18	$(2.5 + \alpha) \times (2.15 + \alpha)$	方形	—	—	?	西側?	—	—	古・後	SB17より新しい
SB19	5.1 × 4.08	方形	—	—	?	西側?	—	—	古・後	SB18より古い 周溝?を有す
SB20	$3.5 \times (1.1 + \alpha)$	方形	$1 + \alpha \cdot 41$	—	?	—	—	—	弥・後・初	SK02より古い
SB21	—	不整形	—	—	—	—	—	—		SB22より古い SK03より新しい
SB22	—	不整形	—	—	—	—	—	—		SB21・SB03よ り新しい

第3表 住居跡一覧表①

	規 模 (m)	形態	主柱穴の数 ・大きさ(cm)	炉・カマド		ベッド の有無	貯蔵穴	時 期	備 考
				炉	カマド				
SB23	$(3.96+\alpha) \times (0.35+\alpha)$	方形	2 + $\alpha$ ・約50	—	—	—	—	弥・後・初	SK03・SK04より新しい
SB24	$(3.0+\alpha) \times (2.0+\alpha)$	方形	—	—	—	—	有?	弥・後	SK04・SK05より古い
SB25	$(4.0+\alpha) \times (1.9+\alpha)$	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB24より古い
SB26	$(3.45+\alpha) \times (1.2+\alpha)$	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB24・SB25より新しい
SB27	$(1.1+\alpha) \times (1.3+\alpha)$	方形	1 + 55	—	—	—	—	弥・後・前半	SB25より新しく、SB06より古い
SB28	$(2.75+\alpha) \times (0.9 \times \alpha)$	方形	2 + 30	—	—	—	—	? —	—
SB29	$2.45 \times (1.95+\alpha)$	方形	—	—	—	南側	—	弥・後・初?	—
SB30	$3.9 \times (1.2+\alpha)$	方形	—	—	—	—	—	? —	—
SB31	$3.64 \times (0.95+\alpha)$	方形	—	—	—	西北側	—	弥・後・前半	SB32より古い
SB32	$(3.42+\alpha) \times (0.54+\alpha)$	方形	—	—	—	—	—	周溝をもつ	—
SB33	$4.64 + (2.75+\alpha)$	方形	2 + $\alpha$ ・約45	—	—	—	—	弥・後・前半	周溝をもつ
SB34	$(3.2+\alpha) \times (1.35+\alpha)$	方形	1 + $\alpha$ ・約40	—	—	—	—	? —	—
SB35	$3.54 + (1.2+\alpha)$	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB31より古い
SB36	$(3.1+\alpha) \times (1.12+\alpha)$	方形	1 + $\alpha$ ・約50	—	—	—	—	弥・後・前半?	SB35より新しい
SB37	$(1.38+\alpha) \times (0.75+\alpha)$	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB31より古い
SB38	$(1.58+\alpha) \times (0.95+\alpha)$	方形	1 + $\alpha$ ・約35	—	—	—	—	弥・後・初	SB37より新しい
SB39	$(3.19+\alpha) \times (2.85+\alpha)$	方形	—	—	—	—	—	弥・後・前半	SB38より新しい
SB40	$(2.36+\alpha) \times (0.65+\alpha)$	方形	—	—	?	西北側	—	弥・後?	須恵器混入
SB41	$(3.98+\alpha) \times (1.36+\alpha)$	方形	—	—	?	—	—	古・後	SX02より新しい
SB42	$(2.7+\alpha) \times (0.5+\alpha)$	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB41より古い
SB43	$4.35 \times (1.8+\alpha)$	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	—

第4表 住居跡一覧表②

	規 模 (m)	形態	主柱穴の数 ・大きさ(cm)	炉・カマド		ベッド の有無	貯蔵穴	時 期	備 考
				炉	カマド				
SB44	(2.45+ $\alpha$ )×(0.76+ $\alpha$ )	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	周溝をもち、SB45より古い。
SB45	3.9×(2.05+ $\alpha$ )	方形	2(+2)・約25	—	—	—	—	弥・後・後半	SB44より新しい。周溝をもつ。
SB46	3.5×(1.72+ $\alpha$ )	方形	2(+2)・約45	—	—	—	—	弥・後・前半	SB45より古い。
SB47	2.95×(1.45+ $\alpha$ )	方形	2(+2)・約43	—	—	—	—	弥・後?	SB46より古い。
SB48	3.14×(1.7+ $\alpha$ )	方形	—	—	—	—	—	弥・後?	SB49より新しい。
SB49	(2.25+ $\alpha$ )×(0.85+ $\alpha$ )	方形	—	—	—	—	—	弥・後	SB48より古い。
SB50	(1.3+ $\alpha$ )×(1.1+ $\alpha$ )	方形	1+ $\alpha$ ・約44	—	—	—	—	?	
SB51	3.84×(3.2+ $\alpha$ )	方形	—	—	—	—	西側	弥・後	SB52より新しい。
						不整形			
SB52	(2.32+ $\alpha$ )×(2.35+ $\alpha$ )	方形	—	—	—	—	—	?	SD10が新しい。
SB53	(2.9+ $\alpha$ )×(0.5+ $\alpha$ )	方形	2+ $\alpha$ ・約28	—	—	—	—	—	
SB54	(2.4+ $\alpha$ )×(1.8+ $\alpha$ )	方形	—	—	—	—	—	弥・後	SD10より新しい。周溝をもつ。
SB55	4.05×(1.3+ $\alpha$ )	方形	1+ $\alpha$ ・約30	有	—	—	—	弥・後・後半	須恵器混入
SB56	(2.05+ $\alpha$ )+(0.4+ $\alpha$ )	方形	—	—	—	—	—	弥・後・初	SB55より古い。
SB57	—	—	—	—	—	—	—	—	SB55が古い。
SB58	6.0×(1.1+ $\alpha$ )	方形?	2+ $\alpha$ ・約35	—	?	—	—	古・後	SB55・SB56より新しい。
SB59	3.75×(1.8+ $\alpha$ )	方形	3+ $\alpha$ ・約23	—	?	—	—	古・後	SB55より新しい。
SB59b	同 ?	方形	?	有	—	—	—	弥・後・初	炉（焼土上に弥生土器を検出し、周溝をもつ）
SB60	4.5×(1.35+ $\alpha$ )	方形	2+ $\alpha$ ・約35	有	—	—	—	弥・後・初	SB59bより新しい。
SB61	6.5 × ?	不整形	—	—	—	—	—	古・後	
SB62	3.4×(1.7+ $\alpha$ )	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB64より古い。
SB63	4.2×(1.25+ $\alpha$ )	方形	—	—	—	—	—	古・後	SB64より古い。
SB64	6.0×(0.3+ $\alpha$ )	方形	—	—	—	—	—	古・後	SB65・SB66・SB67より新しい。

第5表 住居跡一覧表③

	規 模 (m)	形態	主柱穴の数 ・大きさ(cm)	炉・カマド		ベッド の有無	貯藏穴	時 期	備 考
				炉	カマド				
SB65	$3.7 \times (1.1 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	SB63・SB64より古い。周溝あり
SB66	$(2.2 + \alpha) \times (1.1 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	SB65より古い
SB67	$(3.0 + \alpha) \times (1.0 + \alpha)$	方形?	—	—	—	—	—	?	SB65より古い
SB68	$3.15 \times (1.5 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	SB69・SB70より新しい
SB69	$4.05 \times (2.35 + \alpha)$	方形	$2 + \alpha \cdot \text{約}33$	—	—	—	—	?	SB70より古い
SB70	$2.3 \times (1.5 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	SB69より新しい
SB71	$4.3 \times (2.4 + \alpha)$	方形	$1 + \alpha \cdot \text{約}30$	—	?	南西側	—	古・後	SX13より古い
SB73	$5.25 \times (0.4 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	SB101より古い
SB74	$(1.7 + \alpha) \times (0.5 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	出土遺物はない
SB75	$4.6 \times (0.8 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	弥・後・?	SB76より新しい
SB76	$(3.2 + \alpha) \times (1.2 + \alpha)$	方形	—	—	—	南西側	—	弥・後・?	SB75より古い
SB77	$(4.3 + \alpha) \times (1.55 + \alpha)$	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB75より新しい
SB78	$(3.5 + \alpha) \times (1.85 + \alpha)$	不整形?	—	—	—	—	—	?	SB77より古い
SB79	$4.3 \times (0.9 + \alpha)$	方形	$1 + \alpha \cdot \text{約}40$	—	?	—	—	古・後	
SB80	$(0.6 + \alpha) \times (1.4 + \alpha)$	方形?	—	—	?	—	—	弥・後・?	SB81より古い
SB81	$3.1 \times (2.5 + \alpha)$	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB80・SB82より新しい
SB82	$(1.5 + \alpha) \times (2.7 + \alpha)$	方形?	—	—	—	—	—	?	SB81より古い
SB83	$(2.0 + \alpha) \times (2.8 + \alpha)$	方形	—	—	—	西北側	—	?	SK15より古い
SB84	$(2.35 + \alpha) \times (0.9 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	—	周溝を有す
SB85	$3.45 \times (2.25 + \alpha)$	不整形	—	—	—	—	—	弥・後	SB86より古い
SB86	$3.25 \times (1.65 + \alpha)$	方形	$3 + \alpha \cdot \text{約}22$	—	—	—	—	?	SB85より新しい
SB88	$3.18 \times (2.8 + \alpha)$	方形	$2 + \alpha \cdot \text{約}25$	有	—	—	—	弥・後	周溝を有する

第6表 住居跡一覧表④

	規 模 (m)	形態	主柱穴の数 ・大きさ(cm)	炉・カマド		ベッド の有無	貯蔵穴	時 期	備 考
				炉	カマド				
SB89	$3.5 \times (1.35 + \alpha)$	方形	—	—	?	—	—	古・後?	SB90より古い
SB90	$4.6 \times (1.15 + \alpha)$	方形	—	—	?	—	—	古・後	SB89より新しい
SB91	$(0.75 + \alpha) \times (0.3 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	古・後?	出土遺物なし
SB92	$(1.35 + \alpha) \times (0.4 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	出土遺物なし
									SB91より古い
SB93	$2.8 \times (0.55 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	出土遺物なし
SB94	$6.0 \times (3.1 + \alpha)$	方形	$3 + \alpha$ ・約40	—	?	—	—	古・後	周溝をもつ
SB95	$4.65 \times (1.23 + \alpha)$	方形	$3 + \alpha$ ・約45	—	?	—	—	古・後?	
SB96	$3.05 \times (0.45 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	出土遺物なし
SB97	$3.85 \times (0.55 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	同
SB98	$(2.0 + \alpha) \times (0.2 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	同
SB99	$(3.9 + \alpha) \times (0.38 + \alpha)$	方形	—	—	—	—	—	?	同

第7表 住居跡一覧表(5)

### 住居跡

#### SB01 (第6図)

O : 00 ; E : 05付近に位置する方形住居跡であり、SB06を切っている。床面に焼土を有し、炉と考えられる。6個の柱穴を検出し、4個が主柱穴になると考えられる。

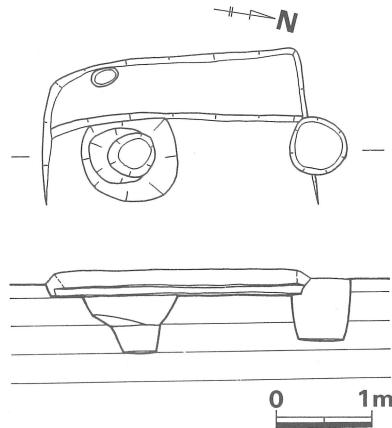
また、SB03・SD04を切っている。

#### SB03

SB01・SB04に切られている方形住居跡である。

#### SB04 (第7図)

S : 05 ; E : 10付近に位置し、SB03を切ったベッド状遺構をもつ方形住居跡である。柱穴等は検出しえなかつた。



第7図 SB04実測図(1/80)

### **SB05 (第8図)**

SB04の東側で検出した方形住居跡で、周溝をもつ。周溝は巾20~25cm、深さ約10cmを測り、全周すると考える。柱穴は9個検出したが、2個が主柱穴であり、焼土を有する。また、住居跡南西隅では、柱穴によって切られている。

### **SB06 (第6図)**

SB01に切られて、東側は削平されている住居跡で、方形を呈すると考えられる。

### **SB10**

O : 00 ; W : 05付近に位置する方形住居跡で、東側は削平されており、SB08・SB09に切られている。

### **SB11a**

SB11bと共に検出した住居跡で、検出時に切合い関係を確認できなく、埋土掘下げ時に2軒であることがわかり、SB11bより古く、弥生後期初頭に比定できよう。

### **SB11b**

SB11aと共に検出した方形住居跡であり、床面に須恵器・杯身を出土した。

### **SB12**

SB11a・SB11bを切っている方形住居跡であり、SB13に切られている。

### **SB14**

SB15・SK01によって切られた方形住居跡で、焼土を床面に検出した。焼土はSB15の検出中に、その埋土に若干みられたので、SB15のカマドの可能性があるので、精査をおこなったが、SB15のカマドでなく、斜面のため、SB14の焼土がSB15埋土に流入したと考えられる。

### **SB15**

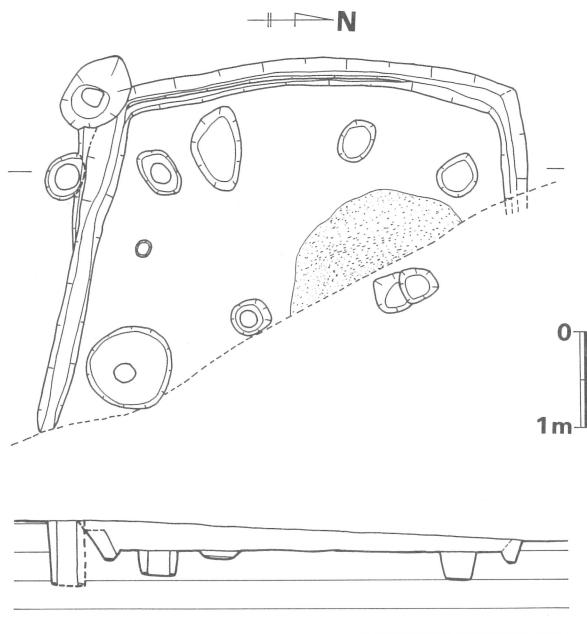
SB14を切った方形住居跡で、東側は削平されている。

### **SB17**

S : 15 ; W : 10付近に位置する住居跡で、SB18より切られている。

### **SB18**

SB17を切っている方形住居跡で、西北隅にベッド状遺構的遺構を有するが詳細は不明である。



第8図 SB05実測図 (1/80)

### **S B19**

S B17・S B18を切った住居跡であり、東壁・南壁に周溝を有する。北西隅・南西隅にベッド状遺構的なものをもつが、他に住居跡が重複している可能性もある。しかし、調査時には、不明であった。

### **S B20**

S K03によって切られていた方形住居跡で、S B21と切合い関係は検出時にはなかった。北西隅に柱穴を検出している。

### **S B23**

S :15；O :00付近に位置し、S K04より南側を切られ、東側は削平を受けている。方形住居跡を呈し、周溝を有し、全周すると考えられる。柱穴等は明確でなく、焼土等は削平されているであろう。

### **S B24**

S K04・S K05に切られ、S B25を切っている方形住居跡である。ほぼ中央に貯蔵状穴の土壙を有するが、住居跡に伴うものか否かは決定できなく、遺物を出土していない。

### **S B25**

S B24より古い住居跡で、西壁にやや巾広い周溝を有する。

### **S B26**

S B25とは切合い関係はないが、S B25より新しい。

### **S B27**

S :25；E :05付近に位置する住居跡で、S K06に切られ、S B25を切っている。東側は削平され、床面には、やや大きい柱穴を有する。

### **S B28**

S :15；E :05付近に位置する方形住居跡で、検出時にはS B29とは重複関係はなかった。床面には柱穴を2個検出できた。

### **S B29**

S B28の東側に検出できた方形住居跡である。床面には、柱穴・焼土等は検出できなかった。

### **S B30**

S :15；E :10付近に位置する方形住居跡で、西壁側一部をのこし、大半を削平され、南壁側周溝部で、S B100と切り合い、それより後出する。周溝巾は約20～25cmで、深さ10cm前後である。

### **S B31**

S B32・S B33・S B35・S B37等の方形住居跡と重複して検出したが、切り合い等は不明である。北壁側にベッド状遺構をもち、北西隅では柱穴を切っている。

### **S B32**

周溝をもつ方形住居跡で、S B31の床面で検出し、S B31の床面で、S B32の床面は削平されていた。周溝巾約10~15cmで、深さ約5cmである。柱穴等は検出できなかった。

### **S B33**

S : 20 ; E : 10の位置にする方形住居跡で、S B31等と同時に検出・調査した。床面で、柱穴2個・周溝を検出した。

周溝は壁に接していないく、S B33に属するものでないと考えられる。

### **S B34**

周溝をもつ住居跡で、北西側をおこし、大半が削平されている。周溝巾約15~30cm・深さ約5cmを測る。

### **S B35**

S B31に切られた方形住宅跡で、S D05を切っている。西壁には、2個の柱穴を検出し、土留め的役目をもつ支柱であろう。

### **S B36**

S B35より新しく、周溝をもち、東・南側は削平され、柱穴等は不明である。

### **S B40**

S : 30 ; O : 00付近に位置する方形住居跡である。この住居跡の検出では、層位の逆転等がみられ、困難した。床面では、遺物を検出できなかった。

### **S B42**

西壁に周溝を部分的に有する住居跡で、大半が削平されている。柱穴等は検出できなかった。

### **S B44**

S : 30 ; O : 00付近に位置する方形住居跡で、周溝を有する。S B45を切っている。周溝巾約20~25cm・深さ約10cmを測る。

### **S B45 (第9図)**

S B44に切られた方形住居跡で、周溝を有する。周溝巾約30cm・深さ約10cmを測る。床面には柱穴2個を検出した。

### **S B46 (第9図)**

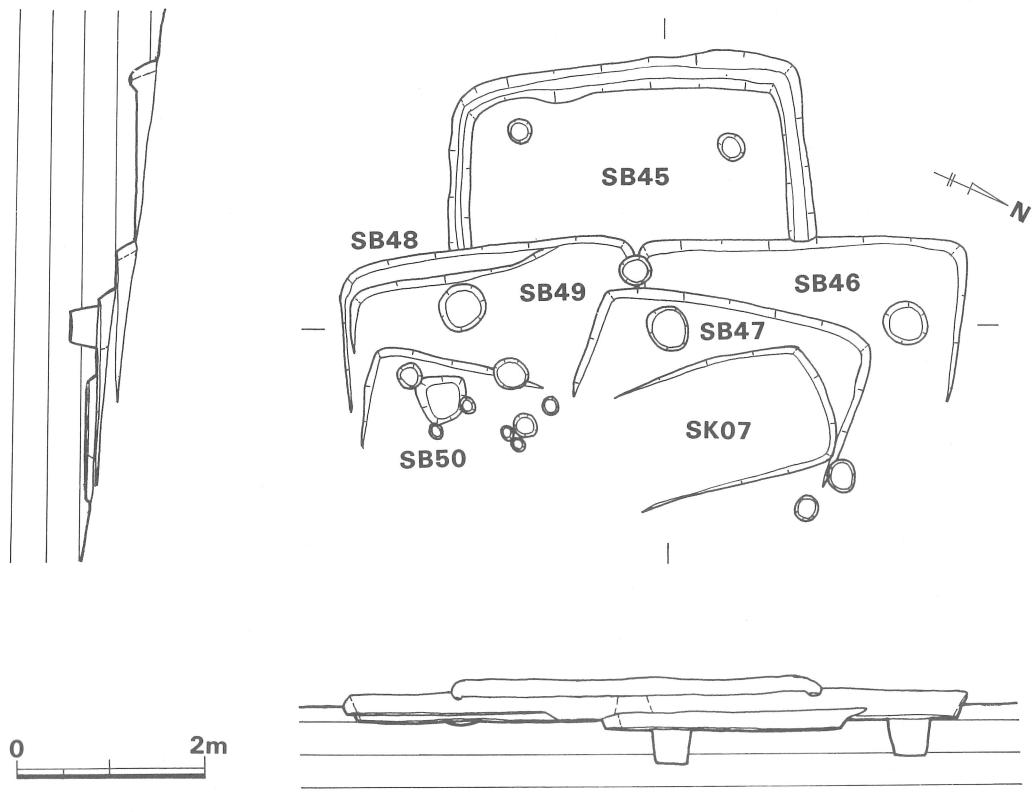
S K06に切られて検出した方形住居跡で、床面で柱穴を検出した。

### **S B47 (第9図)**

S B46より古く、S K07を切って、検出した方形住居跡である。床面には、やや大きい柱穴を2個検出した。

### **S B48 (第9図)**

S B49より新しい方形住居跡で、北壁部では柱穴で切られ、東側大半は削平されている。



第9図 SB45～SB50・SK07 実測図 (1/80)

#### SB51

S : 35 ; E : 05付近に位置する方形住居跡で、東壁は削平され、割合に遺構の保存がよい住宅跡であった。西壁側には、大きさ約 $120 \times 70\text{cm}$ の貯蔵穴と考えられる土壙を、床面に検出した。

#### SB54

S : 40 ; E : 05付近に位置する方形住居跡で、周溝をもつ。西側壁部の周溝は、S D10に切られ、北側のみ残る。周溝巾は約 $15\text{cm}$ を測るが、大半が削平されている。

#### SB55

S : 30 ; E : 15の東側に位置する方形住居跡で、SB56を切っており、SB57に切られている。周溝は西壁側の一部を除き、全周するであろう。周溝の巾は約 $15 \sim 25\text{cm}$ を測る。地権者等の問題で完掘できなかった。

#### SB56

方形住居跡であろうが、SB58によって完全に切られていた。SB55～SB61の中では最古

の住居跡である。

#### S B58

S B55～S B61の一群の住居跡中、最も新しい住居跡で、方形住居跡である。床面に柱穴を2個検出し、床面数cm上に須恵器・杯蓋・杯身を出土した。

#### S B59 a

S B59 b とほぼプランが同規模である。S B61を切って、S B58に切られている。埋土中より須恵器を出土したが、S B61のそれよりも新しい形態をみ、S B58のそれよりも古いので、S B59 a が S B59 b と重複するものであろう。柱穴は、西壁側に3個ならぶので、この住居跡のものであろう。

#### S B59 b

S B59 a に切られた、ほぼ同規模の方形住居跡で、西壁・南壁側に周溝を有する。この住居跡の柱穴を考えることができるのは1個であるが、他はS B58・S B60の周溝部で壊崩したものと考える。床面に焼土をみる。

#### S B60

S B59 b とほぼ同時期で、S B58・S B61に切られており、周溝をもつ。床面に柱穴2個と発掘区外にのびる焼土を検出した。周溝巾は約15～20cmを、深さは約10cmを測る。周溝上には、小形の甕・鉢を出土した。

#### S B61

S B59 b ・ S B60を切っている住居跡で、不整形を呈する。

#### S B62

S : 50 ; E : 00に位置し、S B64に切られていた方形住居跡であり、東側は削平を受けている。西壁は、土壌と重複していたと考えられる。

#### S B63

S : 50 ; E : 05付近に位置し、S B64によって切られ、大半は削平を受けている。

#### S B64

S B62・S B63を切っている方形住居跡であり、大半が削平されている。

#### S B65・S B66・S B67

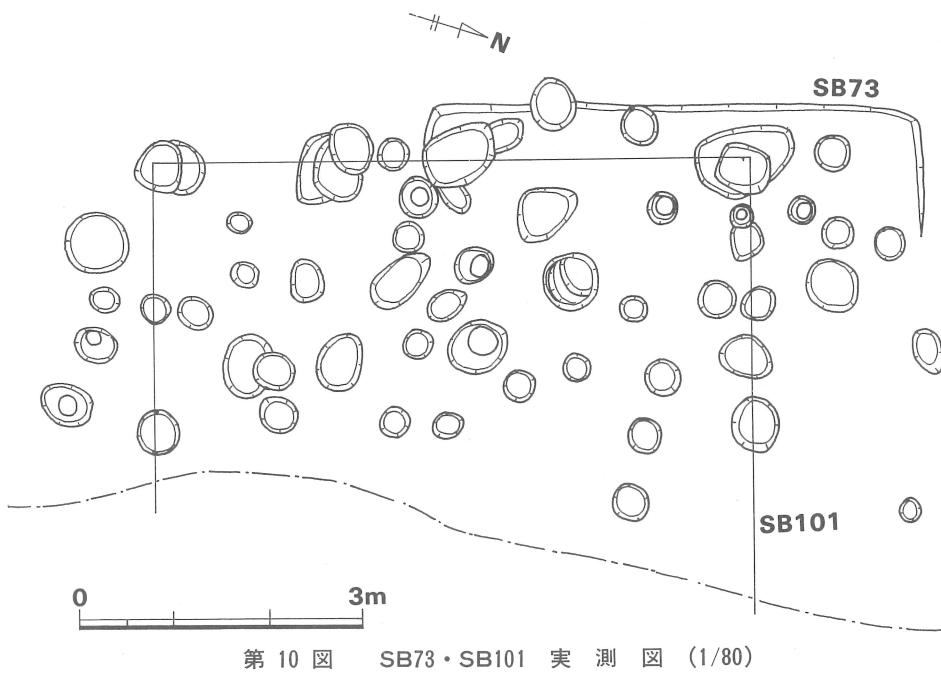
S B63・S B64に削平された住居跡で、周溝のみをのこす。S B65がS B66・S B67を切っている。周溝巾は3軒ともに約15～20cmを測る。

#### S B68

S B69・S B70より新しく、大半が削平され、S B70の埋土等で柱穴は検出できなかった。

#### S B69

S B68より古い方形住居跡で、床面には3個の柱穴を検出したが、その内の1個はS B69に



後出するであろう。

#### SB71

S : 55 ; E : 10付近で検出した方形住居跡で、S X13に後出する。南西隅にベッド状遺構のものを有する。住居跡の重複も考えられる。

#### SB73 (第10図)

S : 50 ; E : 15付近に位置する方形住居跡である。東側は大半が削平をうけており、また、SB101とは重複して検出していない。

#### SB74

SB71の東側に位置する住居跡で、南西隅のみをのこし、大半は削平をうけている。

#### SB75

S : 65 ; O : 00に位置し、SB76より新しい方形住居跡で、SB76・S X12によって柱穴等は検出しえなかった。

#### SB76

SB75によって切られた方形住居跡である。南西隅にベッド状遺構をもつ。

#### SB77

SB75・SB76より新しく、S X12によって切られている。SB78とともに、戦前に耕作さ

れた段々畑によっ

て削平されていた。

#### SB78

SB77より古く、  
不整形を呈する方  
形住居跡である。

#### SB79

S : 60 ; E : 10  
に位置する方形住  
居跡で、西壁側を  
のぞいて、大半は  
段々畑によって削  
平を受けている。

柱穴を段々畑の削  
平上端に1個をの  
こす。

#### SB80

S : 60 ; E : 15  
に位置し、SB81  
によって切られている。西壁のわずかと南壁を残す。

#### SB81

SB80・SB82を切った方形住居跡であろう。SB81の東側に、やや大きいピットを3個検  
出しているが、貯蔵穴等と考えがたい。

#### SB82

SB81に切られた方形住居跡である。床面に柱穴を2個検出した。

#### SB83

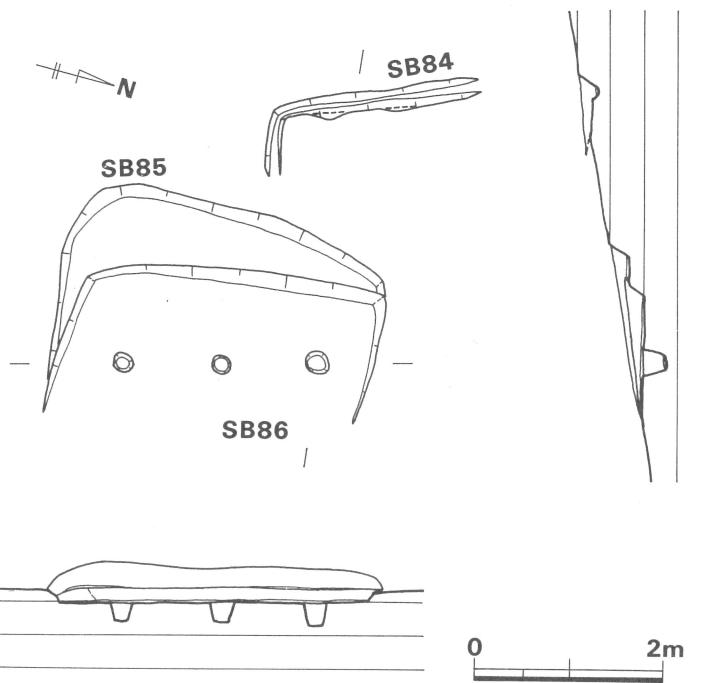
S : 65 ; E : 20付近に位置し、SK15に切られている方形住居跡である。西北隅にベッド状  
遺構を有し、床面で柱穴を重複して2個検出した。

#### SB84 (第11図)

S : 70 ; E : 05付近に位置する周溝をもった方形住居跡である。周溝巾は約20cmを測り、床  
面もほとんど削平されて、深さもあまり目立たない。

#### SB85 (第11図)

SB86に切られた不整形の住居跡である。



第11図 SB84～SB86 実測図 (1/80)

**SB86** (第11図)

SB85を切った

方形住居跡で、ほぼ西側半分をのこし、東側は削平されている。床面では3個の柱穴を検出した。

**SB88** (第12図)

S : 75 ; E : 10

付近で検出した、

周溝を有する方形住居跡である。床面では6個の柱穴を検出したが、そのうち2個が主柱穴である。また、焼土を検出し、炉と考える。周溝は、

東壁側に削平を段々畑で受けている。周溝巾は下端で約5cmを測る。南側の周溝には、2個の柱穴を検出しているが、これは、所謂、壁面土留用支柱の柱穴と考えられよう。

**SB89**

S : 75 ; E : 15付近に位置し、SB90に切られている方形住居跡である。

**SB90**

SB89を切り、西南部に突出部をもつが、埋土等は同様であり、住居跡の一部と考える。床面には柱穴を1個検出した。

**SB91・SB92**

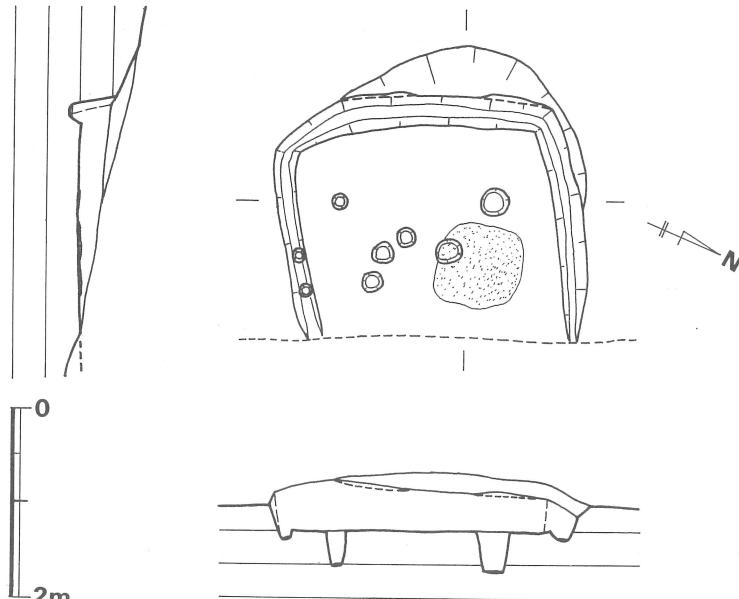
共に方形住居跡であろう。SB91がSB92を切っている。

**SB93**

方形住居跡で西壁側のみを残す。SB91等とは重複していない状況で検出した。

**SB94** (第3図)

S : 75 ; E : 25付近に位置する周溝をもつ方形住居跡である。床面に検出した柱穴のうち、西壁側に3個の柱穴が並ぶが、この柱穴が住居跡に対応するであろう。周溝は、巾が西側で約



第12図 SB88 実測図 (1/80)

40~70cmで、深さ約20cmを測る。

北側の周溝内に柱穴をみるが、  
S B 88と同様に、土留め用の柱  
穴であると考える。

#### S B 95 (第13図)

S : 85 ; E : 15付近に位置す  
る方形住居跡である。床面には  
3個の柱穴を検出し、西壁には、  
段をみる。東側は段々畑によっ  
て削平されている。

#### S B 96~S B 99

S B 95の東側に位置する住宅  
跡で、方形を呈する。S B 97は  
S B 99によって切られている。

4軒とも柱穴をできないまでに、段々畑に  
よって削平されていた。

#### 掘立柱建物

#### S B 100 (第4・5図、第2表)

S A 02の南側、S B 30の東側に位置する  
2間×2間の総柱の建物である。柱間間隔  
は平均で 1.5m を測る。柱穴の 5 では柱痕  
径14cmを測る。

#### S B 101 (第10・14図、第3表)

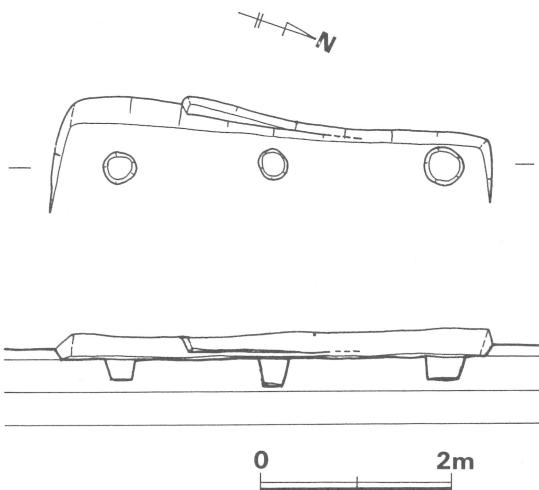
S B 73の東側に位置する建物で、3間×  
(2 + α)間である。柱穴の 3 は検出して  
いない。柱間間隔は、短辺で平均 2.1m を、  
長辺で平均 1.5m を測る。

#### S B 102 (第3図)

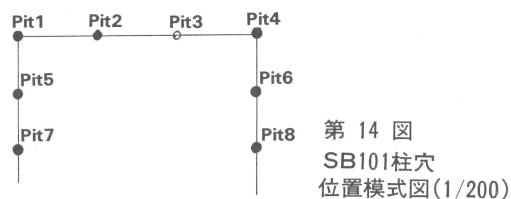
S A 01・S B 94の東側に位置する建物で、  
全容は不明である。柱穴の径は約40~60cm  
を、深さ40~50cmを測る。

#### S B 103

S B 55の埋土中に柱穴を検出した建物で、



第13図 SB95実測図 (11/800)



第14図  
SB101柱穴  
位置模式図(1/200)

柱穴番号	大きさ	深さ	柱痕の径
	東西×南北		
Pit 1	56 × 52	70	—
Pit 2	54 × 42	71	—
Pit 3	— × —		—
Pit 4	55 × 60	73	—
Pit 5	34 × 33	72	—
Pit 6	38 × 38	70	—
Pit 7	48 × 46	68	—
Pit 8	51 × 58	68	—

第8表 S B 101 柱穴計測表 (単位: cm)

S B 55より新しい。2間のみはわかるが、全容は不明であり、S B 100と同様の建物と考えられる。

## 土 壤

### S K01

S B 08によって切られ、S B 14・S B 15を切っている。不整形を呈し、平面的に土壤の重複があるようであるが、検出時、切合い関係は認められなかった。

### S K02

S B 14・S B 20に切られている方形の土壤で、西北隅は柱穴によって切られている。床面は、ほぼ水平で、柱穴を検出している。

### S K03

S B 21・S B 22によって切られ、S B 20を切っている不整形を呈する土壤で、東側の大半を削平されている。底面は舟底状を呈する。

### S K04 (第15図)

S B 23・S B 24・S K05を切ったほぼ円形の土壤で、底面はほぼ水平である。

### S K05

S B 24・S K04によって切られている土壤で、方形を呈する。底面はほぼ水平であり、東側は削平されている。

### S K06

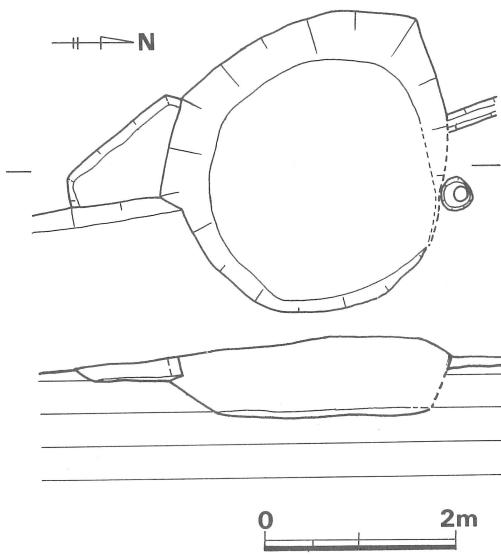
S B 27を切って、S B 46に切られているが、S B 27・S B 46・S K06はほぼ同時期であろう。不整形を呈し、底面は段を有するが、東側は削平されていると考えられる。

### S K07 (第9図)

S B 47によって切られ、その床面の精査時に、検出した土壤で、方形を呈する。底面はほぼ水平である。

### S K08

S B 39を切ったほぼ円形を呈する土壤であり、床面はほぼ水平である。東側は削平されている。床面直上で弥生土器（高杯等）を出土している。



第 15 図 SK04実測図 (1/80)

土壌番号	規模 (cm)	形態	時期	備考	土壌番号	規模 (cm)	形態	時期	備考
SK01	(386+α)× (205+α)	不整形	III B	SK15・SB15 を切っている	SK12	231× (250+α)	方形		SK14より新しい
SK02	205× (128+α)	方形		SB14・SB20 に切られている	SK13	192×177	不整形		
SK03	145× (130+α)	不整形			SK14	(115+α)× (90+α)	方形?	III B	
SK04	314×302	円形	III B		SK15	164× (288+α)	不整形		
SK05	(150+α)× (80+α)	方形?	弥・後	SK04より古い	SK16	173× (120+α)	円形	III B	
SK06	(210+α)× 159	不整形			SK17	395× (152+α)	不整形	II B	
SK07	(225+α)× 139	方形			SK18	160×240	不整形	弥・後	
SK08	385× (230+α)	不整形	弥・後		SK19	285× (112+α)	不整形		
SK09	202× (241+α)	方形	末 弥・後		SK20	180× (55+α)	方形?	III B	
SK10	132× (152+α)	方形	III B		SK21	(220+α)× (65+α)	不整形	III A	
SK11	(125+α)× (205+α)	円形?			SK22	(96+α)× (56+α)	不整形	弥・後 末	SD01を切っている

第9表 土 壤 一 覧 表

### SK09

SB39の南側に位置する方形の土壌で、床面はほぼ水平である。東側は削平されている。

### SK10

S :30 ; E :15付近に位置する土壌で、方形を呈する。床面はほぼ水平で、東北側は削平されている。

### SK11

S:40; E:10付近に位置する土壌で、SB52より古い。ほぼ円形を呈し、東側が削平されている。

### SK12

S :65 ; E :20付近に位置する土壌で、SK14を切っている。方形を呈し、南壁側・北壁側に柱穴を検出している。底面はほぼ水平であり、底面でSK13を検出した。

### SK13

SK12の底面精査時に検出した不整形の土壌である。深さはあまりなく、底面はほぼ水平であり、柱穴を検出した。柱穴はSK13・SK12にともなうが不明である。

#### **S K 14**

S K12によって切られた土壌で、方形を呈する。底面はほぼ水平であり、東側は流失している。

#### **S K 15**

S B83を切って、検出した土壌で、隋円形に近い土壌である。東側は流失し、底面はほぼ水平である。

#### **S K 16**

S : 65 ; E : 15付近に位置する土壌で、ほぼ円形を呈する。段々畑によって地山整形をうけている段の部分に検出したため、東側が削平されている。床面は水平である。

#### **S K 17**

S : 65 ; E : 15付近に位置する土壌で、隨円に近い不整形を呈する。床面では、柱穴等を検出しているが、土壌に伴うかは、不明である。東側は削平されている。

#### **S K 18**

S K17の東側に位置する不整形を呈する土壌で、柱穴と切合っている。

#### **S K 19**

S : 40 ; O : 00付近に位置する土壌であり、円形を呈する。底面はほぼ水平であり、東側は削平されている。

#### **S K 20**

S B61を切っている土壌で、ほぼ方形を呈するであろう。S B60等と同様に調査区外にのんでいるため、全容をあきらかにできなかった。

#### **S K 21**

S : 15 ; W : 10付近に位置する土壌で、不整形を呈する。S B17等によって切られている。底面はほぼ舟底状を呈する。

#### **S K 22**

S : 05 ; W : 15に位置する土壌で、S D01を切っている。不整形を呈し、底面は丸味のある舟底状である。

### **溝**

#### **S D 01**

S : 10 ; W : 15付近に位置し、S K22によって切られている。長さ約 3.9m・巾0.4 ~ 0.6mを測る。南端では、S D02と接続するが、別遺構であり、北端では、S X01と重複する。切合は不明である。

#### **S D 02**

S B17・S B18の西側に位置する溝で、北端では、S D01に接続するが、別遺構である。長

さ約 7.5m・巾0.35～0.5mを測り、柱穴等を切っている。溝南部の東側は流失し、西壁のみがのこる。

#### S D03

S X02の調査後、検出した溝で、S X02より古い。長さ約 8.4m・巾0.25～0.6mを測り、南端では削平されている。

#### S D04

S :05；E :10付近にまわる溝で、S D05を切っている。北端ではS B01に切られ、東南端では削平されて、東側は不明である。残存全周長約13.7m・巾約0.35～0.95mを測り、南部で巾広く、西南部で巾狭くなっている。

#### S D05

S D04に切られた溝で、南部ではS B35によって切られ、東部ではS B100付近で削平されている。残存全周長約19.3m・巾約0.4～0.75mを測り、西北部ではやや巾広い。

#### S D06

S :20；E :15付近に位置する溝で、長さ約 2.6m・巾約0.4mを測り、両端で消失する。

#### S D07

S D06の南側に位置する溝で、両端が削平されていた。長さ約 2.5m・巾約0.4mを測る。検出時S D05に続く溝ようであったが、別遺構のようである。底面には柱穴を検出している。

#### S D08

S :35；E :05付近で検出した溝で、長さ約 5.1m・巾約0.3～0.4mを測る。南側では消失し、北側では柱穴によって切られている。

#### S D09

S D08の東側に、S B36の西側に位置し、長さ約 4.2m・巾約0.45mを測る。南側では柱穴によって切られ、削平をうけ、北側ではS B35によって切られ、他の住居跡群等に重複していた。

#### S D10

S :40；E :05付近に位置する「L」字状の溝である。S X05の調査に検出し、東側でS B52によって切られている。長さ約 4.8m・巾約0.2～0.65mを測る。

#### S D11

S D10の南側に位置する溝で、長さ約 5.2m・巾約0.2～0.45mを測る。西側の一部では、S B54の周溝を重複している。南側では消失し、東側ではS B52・S K11によって重複していたであろうが、検出時は切合等はなかった。

#### S D12

S :40；E :15付近に位置する溝で、長さ約 1.9m・巾約0.3mを測る。東側では柱穴によ

って切られ、消失している。

#### S D13

S :45 ; E :15付近に位置し、長さ約 2.5m・巾約0.45mを測る。北側では消失する。

#### 不明遺構

上罐子遺跡第3次調査では、丘陵の東側を調査し、その斜面に、住居跡等が立地している。よって、住居跡等の構築時に、低い方に客土を必要としたと考える。その客土を掘った部分であろう。また、それ以外の性格の遺構もあると考える。

以上のような遺構を不明遺構とした。

#### S X01

発掘区西北部に位置し、S D01と重複している。床面には柱穴を検出するが、住居跡でないようである。東側は消失・削平されている。

#### S X02

S :20 ; W :20付近より S :30 ; O :00付近に位置する落込みで、西側斜面では段的部分をみる。S X02を調査した後に、S D03を検出した。

#### S X04

S :30 ; O :00付近に位置し、不整形を呈する。全容は不明である。

#### S X05

S :35 ; E :05に位置し、長細い形態を呈する。S X05の調査後、S D10などを検出した。

#### S X06

S X05の南側に位置し、不整形を呈する。

#### S X07～S X11

S B68～S B69の西側に位置し、不整形を呈する。

#### S X12

S :40 ; O :00付近に位置するもので、隅丸方形状を呈する。S X12を調査した後に、S B78を検出した。

#### S X13

S X11の東側で検出したもので、不整形を呈する。S X11調査後にS B71を検出した。

#### S X14

発掘区中央部の西側で、須恵器大甕を単独で出土したが、遺構は検出できなかった。大甕はつぶれた状態であった。

### (3) 遺物

上罐子遺跡群第3次調査では、住居跡・土壙・溝等より多量の土器（弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器）、農工具としての石器（石鎌・石包丁）・漁具としての石器（石錘）・紡織具としての石器（紡錘車），装身具（ガラス小玉；滑石製管玉・勾玉）や武具としての石器（石戈）・鉄器（鉄劍）が出土した。

なお、以下の記述では、遺構に伴わない遺物については略述する。また、須恵器については小田氏編年を基準とした。

#### 柵列（柱穴列）出土土器

##### S A 01・S A 02

各柱穴より弥生土器の細片を出土したのみで、時期判定になりえない。

##### 住居跡出土土器（第16～20図、第10・11表）

住居跡出土遺物は第10・11表にあらわすとおりである。

##### S B 01

###### 弥生土器

壺 口縁部を1個体出土し、弥生後期中頃に比定できる。

また、埋土中より中期後半の壺・高杯・短頸壺の細片をみる。

##### S B 03

###### 弥生土器

壺 後期に比定できる底部を出土している。埋土中より、弥生中期に比定できる甕を出土している。

##### S B 04

###### 弥生土器

甕 後期初頭に比定できる口縁・底部を出土する。また、埋土中には中期中頃の壺・短頸壺・甕の小片が出土している。

##### S B 07

###### 弥生土器

壺 後期前半に比定できる底部・胴部を1個体分出土している。また、中期中頃の土器もみ、鋤先口縁の壺などの小片である。

##### S B 08

###### 須恵器

杯蓋 1個体分出土している。

杯身 2個体分出土し、杯蓋とともにIII B 期の古式に比定できる。

住居跡	時期	弥生土器					石器	鉄器	砥石	住居跡	時期	弥生土器					石器	鉄器	砥石
		壺	高杯	甕	器台	その他						壺	高杯	甕	器台	その他			
SB 01	弥・後・中			1					○	SB 38	弥・後・初								
SB 03	弥・後・後半	1		1					○	SB 39	弥・後・前半								○
SB 04	弥・後・初			2						SB 40	弥・後・?							◎	
SB 07	弥・後・前半	1							○	SB 42	弥・後・初	1						○	
SB 10	弥・後・初	1		2	2				○	SB 43	弥・後・初	1		2				○	
SB 11a	弥・後・初	1							○	SB 44	弥・後・初?								○
SB 14	弥・後・初	1		1						SB 45	弥・後・後半	1							
SB 15	弥・後・前半 (長頸)	1		2		1				SB 46	弥・後・前半		1	1					
SB 20	弥・後・初頭	2		4	1	1				SB 47	弥・後・?								
							(蓋)			SB 48	弥・後・?								
							(鉢)			SB 49	弥・後								
SB 23	弥・後・初頭			1	2					SB 51	弥・後								
SB 24	弥・後・中頃	1		2						SB 54	弥・後								
SB 25	弥・後・初		2	1					×	SB 55	弥・後・後半		1	1	1	×			
SB 27	弥・後・前半	1								SB 56	弥・後・初								
SB 29	弥・後・初?								○	SB 59b	弥・後・初		1	1					
SB 31	弥・後・前半?				2					SB 60	弥・後・初		2		1				
SB 32	弥・後・初?									SB 75	弥・後・?								
SB 33	弥・後・前半	1		2		1				SB 76	弥・後			2					
SB 35	弥・後・初	1					(小形鉢)			SB 80	弥・後・?			1					
SB 36	弥・後・前半?						1			SB 85	弥・後								
SB 37	弥・後・初						(鉢)			SB 88	弥・後					1			

第10表 住居跡出土遺物一覧表 ①

○ 石包丁  
△ 石錐  
× 紡錐車  
◎ 石戈  
▲ 石斧

### SB 10

#### 弥生土器

壺 底部・胴部片を出土している。

甕 口縁部・底部を2個体分の破片を出土。

器台 2個体分の出土をみる。壺・甕は弥生後期初頭に比定できる。

### SB 11a

#### 弥生土器

住居跡	時期	土 師 器				須 恵 器								石 器	鉄 器	砥 石	備 考	
		壺	高杯	甕	その他	杯蓋	杯身	高杯	竈	埴	瓶	壺	甕	その他				
SB08	III B					1	2											
SB09	III B																	
SB11b	III B	1		2		5	2				1	1	2					
SB12	III B			2		2	4				1		1					
SB16	III B							1										
SB17	III A					1	1				1				▲	○		
SB18	III B							2					1		△			
SB19	III A					2		1										
SB26	III B					(2)	2		2				2				VII・VIII	
SB41	III B			1				1			1		1					
SB58	III A～III B	1				3	1											
SB59a	III B					1	2											
SB61	III A					1												
SB62	III A					2												
SB63	III B					(1)	(1)										V	
SB64	III B					2												
SB71	III B							1										
SB77	III B						2		1						▲	○		
SB79	III A～III B	3	1	1		2	1						1					
SB81	III B					1	1				1		2					
SB89	III A～III B													盤 1				
SB90	III A～III B			1						1				1				
SB91																		
SB94	III A			1				1						1				
SB95																		

第11表 住居跡出土遺物一覧表②

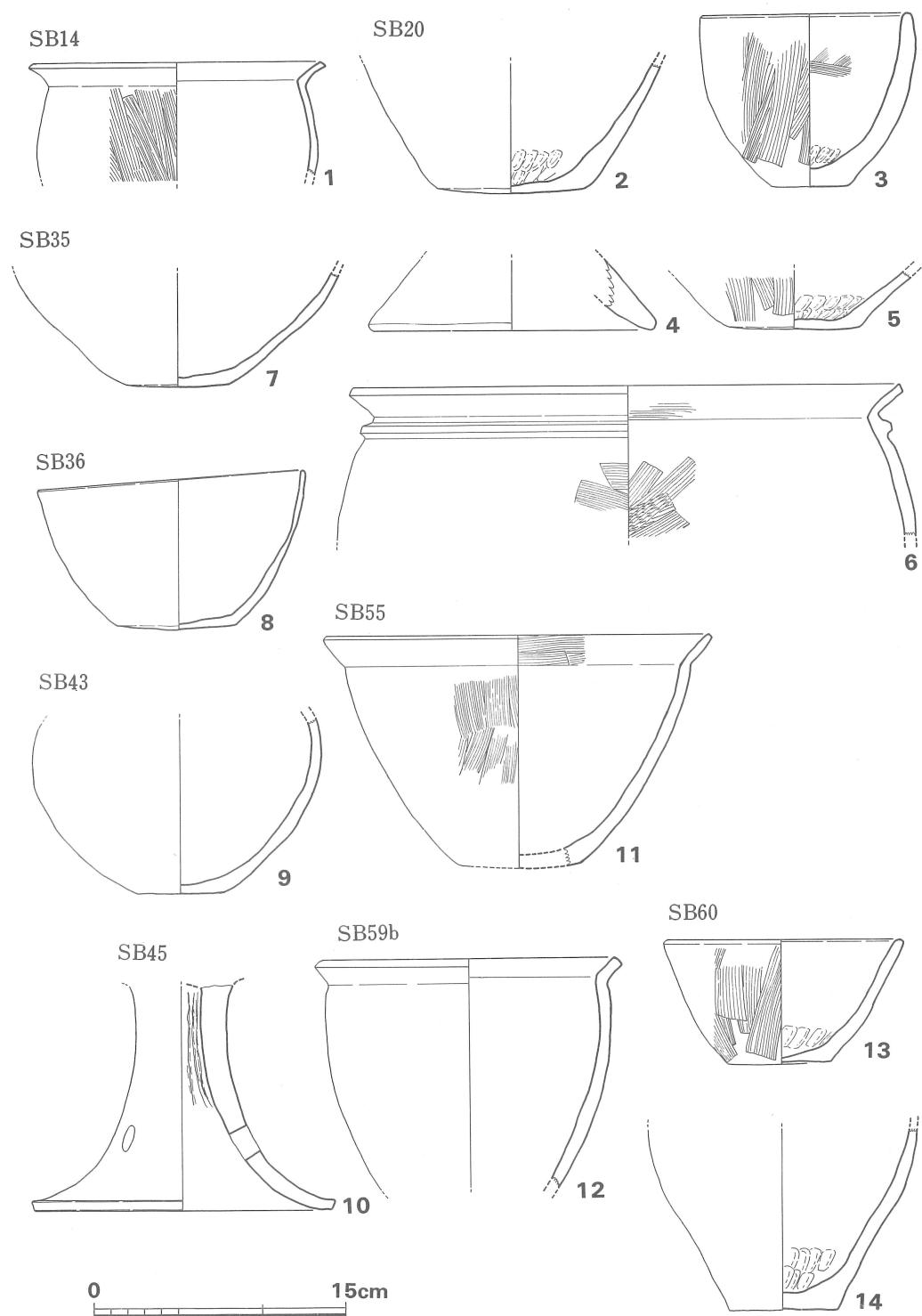
**甕** 口縁部・底部が出土し、胎土等より1個体であろう。後期初頭に比定できよう。

なお、埋土中に、中期の甕2個体・高杯を出土した。

### SB11b

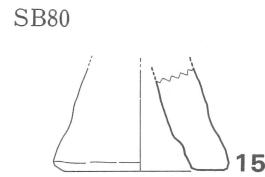
#### 土師器

**壺** 1個体口縁部を出土している。



第 16 図 住 跡 出 土 土 器 実 測 図 ① (1/4)

**甕** 2個体分の口縁部・底部等を出土する。



**須恵器** (第19図19・20)

**杯蓋** 5個体分出土している。

**杯身** 2個体分出土している。19は、口径10.8cm・器高3.8cmを測り、胎土は砂粒を含むが、精選され、茶色氣味の淡青灰色を呈す。

**壺・甕・横瓶(?)** 20は甕で茶褐色を呈する。その他壺・横瓶 SB88  
が出土している。

杯蓋・杯身等は、III B期に比定できよう。なお、弥生中期の甕の小片も埋土中にみる。

#### SB12

##### 土師器

**甕** 口縁部・胴部片を出土している。

**須恵器** (第19図21~23)

**杯蓋** 2個体分出土している。21は鉢を有し、胎土は精選され、灰白色を呈し、軟質で非常にあまい焼成である。22は、口径12.6cm・器高3.5cmを測る。体部は横ナデで、部分的に横ナデを止めた指紋痕がみられる。天井部内面は横ナデ後ナデを見る。

**杯身** 4個体出土した。23は口径12.8cm・器高4.2cmを測り、精選され砂粒を含まず、灰茶色を呈す。

**横瓶・甕** 各1個体出土している。

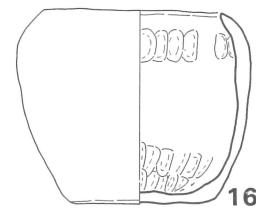
杯蓋・杯身の形態よりIII B期に比定できる。なお、弥生土器(壺・甕)も出土している。

#### SB14

**弥生土器** (第16図1)

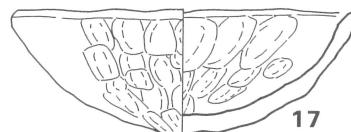
**甕** 1個体出土し、1は口径17.8cmで、口縁部は横ナデで、胴部にはハケ目をみる。後期初頭に比定できる。

なお、中期の開口壺・壺・甕を各1個体出土している。

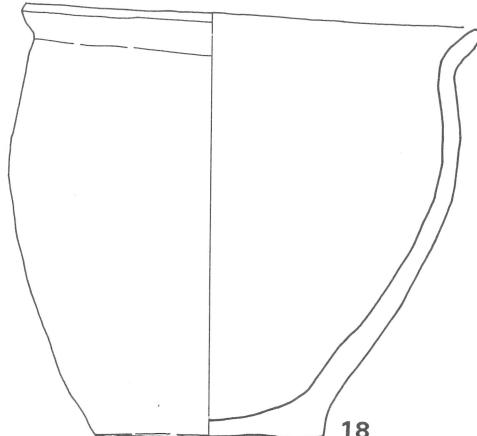


第17図 住居跡出土  
土器実測図②(1/4)

SB33

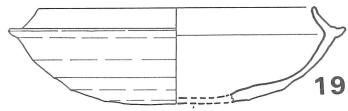


SB15

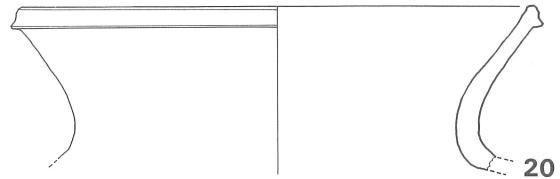


第18図 住居跡出土土器実測図③(1/2)

SB11

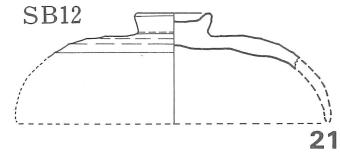


19



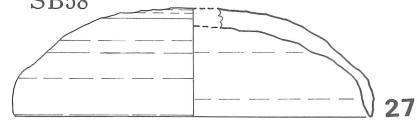
20

SB12

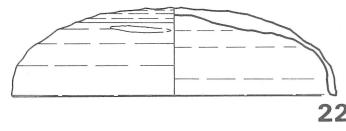


21

SB58



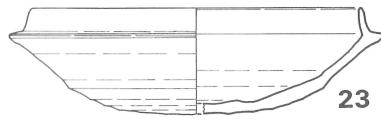
27



22



28

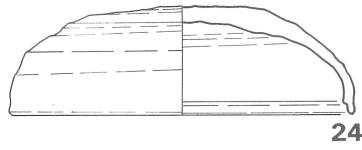


23



29

SB17

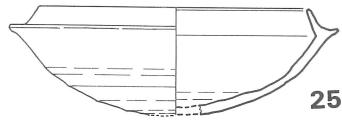


24

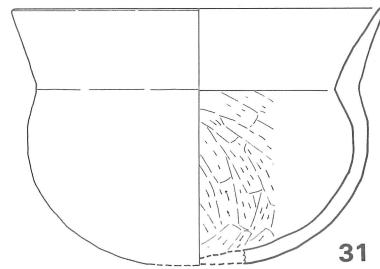


30

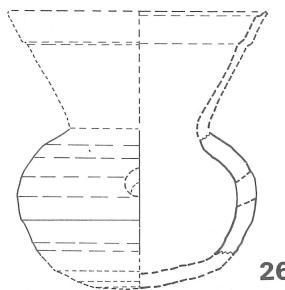
SB26



25



31



26

0 10cm

第 19 図 住居跡出土土器実測図④ (1/3)

## S B 15

**弥生土器** (第18図18)

**壺** 脊部を出土している。

**甕** 2個体出土し、1個体は小型の甕である。18は口径12.0cm・底径6.0cm・器高11.4cmを測る。外面は剥落し、内面は、口縁部が横ナデ、脊部が指頭圧痕後ナデている。

**蓋** 1個体出土しているが、壺とセットになるものでない。

S B 15出土土器は後期初頭に比定できよう。また、中期の開口壺・甕の破片も出土している。

## S B 16

**須恵器**

**杯身** 1個体出土している。III B 期に比定できる。

## S B 17

**須恵器** (第19図24)

**杯蓋** 1個体出土し、24は、口径13.4cm・器高4.3cmを測り、口唇部内面に段をみる。胎土等は良好である。

**杯身** 1個体出土している。他に平瓶の口縁部を出土している。

杯等により III A 期に比定できよう。

## S B 18

**須恵器**

**杯身** 2個体分出土している。

**甕** 1個体出土し、内面に青海波叩き文をみる。

杯身より、S B 18出土土器はIII B 期に比定できる。なお、弥生中期・後期の甕・高杯・器台等の出土をみる。

## S B 19

**須恵器**

**杯蓋** 2個体の口縁部等が出土している。

**高杯** 脚部が出土し、2段の透孔をみる。

S B 19出土土器は、杯蓋の口唇部・高杯の2段透孔でIII A 期に比定でき、その他、弥生土器中期の壺・短頸壺・甕の破片や後期の壺の破片などが出土している。

## S B 20

**弥生土器** (第16図 2～6)

**壺** 2個体を出土している。2は、底径8.8cmを測り、外面は剥落し、内面はナデられ、内底部には指頭痕をみる。5は、底径7.8cmで、外面にはハケ目をみ、内面はナデて、内底部に指頭痕をみる。

**甕** 4 個体を出土し、6は、口径32.8cmを測り、頸部に突帶をみる。

**器台** 1 個体を出土し、4は、底径16.7cmを測り、胎土は砂粒を含み、赤色化している。

**鉢** 1 個体を出土し、3は、口径12.3cm・底径4.6cm・器高10.25cmを測り、胴部外面にはハケ目をみ、内面ではハケ目整形後ナデて、内底部には指頭痕をみる。

S B20出土土器の2～6は、すべて床面直上の出土で、後期初頭に比定できよう。

#### S B23

##### 弥生土器

**甕** 1 個体出土している。

**器台** 2 個体の出土をみる。

S B20と同様にS B23と同時期で後期初頭である。

#### S B24

##### 弥生土器

**壺** 1 個体胴部片が出土している。

**甕** 2 個体分の底部・胴部片が出土した。

後期の中頃に比定できる。

#### S B25

##### 弥生土器

**甕** 1 個体分であろう口縁部が出土した。

**高杯** 脚部と杯部の接合部が出土した。

後期初頭に比定できる。

#### S B26

##### 須恵器（第19図25・26）

**杯身** 2 個体出土し、25は、口径10.6cmを測り、胎土等は良好である。

**甕** 26は胴部のみで、下半部にヘラ削りを有する。他にもう一個体出土している。

**甕** 2 個体分の胴部片を出土し、青海波叩き文が異なる。

杯身等により、III B 期に比定できよう。

#### S B27

##### 弥生土器

**壺** 底部の1個体分を出土した。後期初頭に比定できる。他に中期の甕の小片を出土した。

#### S B31

##### 弥生土器

**甕** 2 個体分の口縁部が床面直上に出土している。後期前半に比定できる。

#### S B33

### 弥生土器（第18図33）

**壺** 底部より1個体分が出土している。

**甕** 底部で2個体分が出土し、口縁部は1個体分であった。

**鉢** 小形品で、17である。口径9.0cm・器高3.4cmであり、口唇部は丸味がある。体部内外面には、3・4段の指頭痕の成形がみられる。砂粒を含み、黄茶色を呈し、軟質でややあまい。

S B 33出土土器は後期前半に比定できよう。他に、中期の土器破片が混入していた。

### S B 35

#### 弥生土器（第16図7）

**壺** 1個体が出土している。7は底径6.0cmを測り、外面は剥落し、内面はナデている。砂粒を含むが、割合良好で、黄灰色を呈する。

後期初頭に比定できよう。他に、中期後半である壺などを混入していた。

### S B 36

#### 弥生土器（第16図8）

**鉢** 完形品が出土している。8は、口径15.8cm・底径8.1cm・器高8.9cmを測り、体部内外面はナデられている。胎土は砂粒をみず精選され、黄灰色を呈する。後期初頭～前半に比定できよう。

### S B 41

#### 土師器

**甕** 口縁部1個体が出土している。

#### 須恵器

**杯身** 1個体を出土している。

**平瓶** 胴部片を出土し、カキ目を外面に施こしている。

**甕** 胴部がのこり、青海波叩き文をみる。

S B 41出土土器は、III B 期に比定できよう。他に、弥生後期の高杯等の破片を混入していた。

### S B 42

#### 弥生土器

**壺** 底部を出土している。後期初頭に比定できる。他に、中期の破片の甕・高杯等を出土している。

### S B 43

#### 弥生土器（第16図9）

**壺** 1個体分の胴部出土した。9は、底径5.0cmを測り、胎土は割合に砂粒を含み、黄色味のある灰茶色を呈し、やや軟質である。

**甕** 2個体分の口縁部を出土した。

S B 43出土土器は後期初頭に比定できよう。

#### S B 45

##### 弥生土器（第16図10）

**高杯** 10の脚部1個体分を出土している。器表は剥落のため不明である。底径18.3cmを測り脚部はシボリ痕を内面にみ、円形の透孔を3ヶ所みる。

S B 45出土土器は後期後半に比定できよう。他に、中期の短頸壺・壺の破片を混入していた。

#### S B 46

##### 弥生土器

**高杯** 脚部片を出土している。1個体分である。

**器台** 割合に粗製の胎土の器台を出土した。

後期前半に、S B 45との切合等により比定でき、中期の土器片を混入している。

#### S B 55

##### 弥生土器（第16図11）

**甕** 口縁部が1個体分を出土した。

**器台** 割合に粗製な胎土であり、1個体の出土である。

**鉢** 11は、口径23.0cm、底径7.4cm・器高13.7cmを測る。口縁部外面は横ナデで、内面はハケ目調整である。体部外面はハケ目で、内面はナデている。

S B 55出土土器は後期後半に比定できる。わずかに須恵器が混入している。

#### S B 58

##### 土師器（第19図31）

**壺** 1個体出土している。31は、口径14.5cmを測り、胎土には若干砂粒を含むが、精選されており、赤茶色を呈し、やや軟質である。胴部内面はヘラ削りが施されている。

##### 須恵器（第19図27～30）

**杯蓋** 3個体出土している。27は、口径14.0cm・器高4.3cmを測り、胎土等は坂元2号墳の墓道部左側石列出土の供献土器に類似している。29は、口径13.9cmを測り、肩部に沈線状のくぼみを有する。30は、口径14.0cm・器高4.6cmを測り、肩部に肩を有する。

**杯身** 1個体出土している。28は、口径12.0cm・器高14.8cmを測る。

S B 58出土土器は、III A期～III B期に比定できよう。

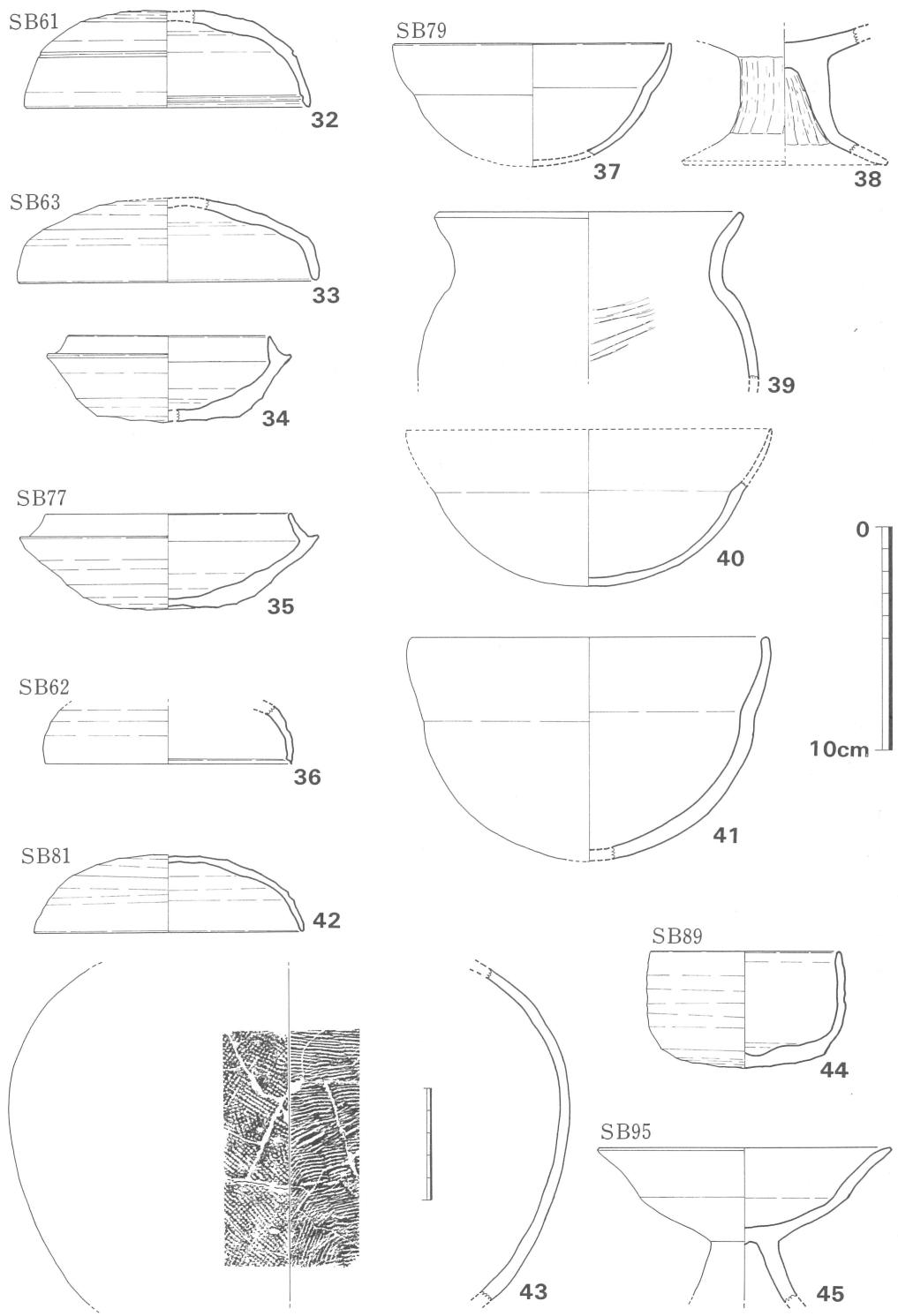
#### S B 59 a

##### 須恵器

**杯蓋** 1個体出土している。

**杯身** 2個体出土している。

杯の蓋・身ともにIII B期に比定できる。



第 20 図 住居跡出土土器実測図⑤ (1/3) [43は1/6]

## S B59 b

### 弥生土器（第16図12）

**甕** 底部を欠損する1個体を出土した。12は、口径18.0cmを測る。口縁部は横ナデで、胴部外面は剥落し、内面はナデている。

**器台** 1個体分の破片を出土している。

S B59 bは後期初頭に位置づけられる。

## S B60

### 弥生土器（第16図13・14）

**甕** 2個体分が出土している。14は、底径が6.6cmで、胴部内面はナデている。底部内面には指頭痕を見る。

**鉢** 完形品である。13は、口径14.1cm・底径6.1cm・器高7.3cmを測り、体部外面は指頭痕を見る。内面はナデている。底部内面は指頭痕を見る。

S B60出土土器は後期初頭に比定できよう。

## S B61

### 須恵器（第20図32）

**杯蓋** 1個体出土している。32は、口径12.7cm・器高4.7cmであり、口唇部内面に沈線を有する。III A期に比定できよう。他に、弥生中期の土器片を混入している。

## S B62

### 須恵器

**杯蓋** 2個体分出土している。36は、口径11.0cmで、砂粒を含まず良好である。

III A期に比定できよう。また、弥生中期の土器片等を含む。

## S B63

### 須恵器（第20図33・34）

**杯蓋** 天井部に欠損を見る1個体が出土した。33は口径13.6cmで、精選した胎土であり、あまい焼成であり、灰色を呈する。

**杯身** 1個体出土しているが、これは混入であろう。34は、口径9.9cm・器高3.9cmで、わずかにあまい焼きであるが、胎土等は良好である。

杯蓋よりIII B期に比定できよう。

## S B64

### 須恵器

**杯蓋** 2個体分出土している。III B期に比定できる。他に、弥生中期の土器片を混入していた。

## S B71

## 須恵器

高杯 脚部を1個体分出土している。III B期に比定でき、弥生後期の土器片の混入もみる。

## S B76

### 弥生土器

器台 2個体分出土している。後期に比定できるものである。他に、中期の土器の混入をみる。

## S B77

### 須恵器（第20図35）

杯身 2個体分を出土している。35は、口径11.1cm・器高4.2cmを測る。

甕 胴部片を1個体分出土している。

S B77出土土器はIII B期に比定できよう。

## S B79

### 土師器（第20図37～41）

壺 3個体出土している。37・40・41は、口頸部が外反しつつ、内湾するもので、底部は丸くおさめる。砂粒をわずかに含む胎土は、赤茶色乃至暗赤茶色を呈する。

甕 1個体出土している。39は、口頸部では横ナデで、胴部外面はナデで、内面には荒いハケ目をみる。

高杯 脚部のみがのこる1個体分を出土した。38の脚部内外面にヘラ削りをみる。

### 須恵器

杯蓋 2個体分が出土している。

杯身 1個体分が出土している。

甕 内面に青海波叩き文をみる胴部が出土した。

以上のような土器が出土したが、III A～III B期に比定できるようである。

## S B80

### 弥生土器（第17図15）

器台 1個体出土している。15は底径9.2cmを測り、砂粒を含む胎土で、軟質であまい焼成である。

後期に比定できよう。

## S B81

### 須恵器（第20図42・43）

杯蓋 1個体出土している。42は、口径12.0・器高3.45cmを測り、砂粒を含まず、精緻な焼きであり、淡淡灰色を呈する。所謂、赤焼き土器とされるものである。

甕 2個体出土で、1個体は、赤焼きである。43がそれで、外面は格子状叩き文で、内面は

平行叩き文である。

S B81出土土器は、III B期に比定でき、弥生中期の土器片も混入している。

#### S B89

##### 須恵器（第20図44）

盤 完形品の出土である。44は、口径8.3cm・器高5.2cmを測る。胎土には、砂粒を含むが堅緻で良好である。

III A～III B期に比定できよう。

#### S B90

##### 土師器

甕 口縁部のみが出土している。

##### 須恵器

埴蓋 1個体出土している。

時期はIII A～III B期に比定できよう。また、弥生土器の甕も混入して出土している。

#### S B94

##### 須恵器

杯身 1個体出土している。

甕 口縁部と胴部で青海波叩き文をみるもので1個体であろう。

III A期に比定できる。

#### S B95

##### 土師器（第20図45）

高杯 脚部裾部を欠損するものを1個体出土した。45は、口径13.0cmを測る。砂粒を含むが、精緻な焼成である。

##### 土壙出土土器

#### S K01

##### 須恵器

杯蓋 小片であるが、2個体分の口縁部が出土している。

甕 内面に青海波叩き文をもつ胴部が出土した。

##### 土師器

甕 口縁部が出土している。

S K01出土土器は、III B期に比定できる。他に弥生中期の壺・甕が、後期の壺・甕・器台が破片として出土している。混入と考えられる。

#### S K02・S K03

この2個の土壙には出土遺物はなかった。

## SK04

須恵器（第23図50～53）

**杯蓋** 3個体あまり出土した。50は、口径12.3cmを測り、胎土には砂粒なく、精選されていて、焼きは精緻で良好である。赤灰色を呈し、所謂、赤焼きとされるものである。

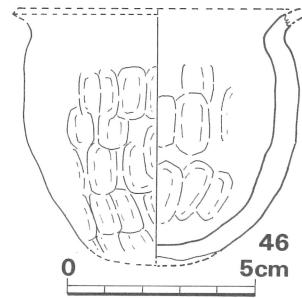
**杯身** 4個体出土している。51は、口径10.8cmを測り、砂粒を含まない胎土で、精緻で良好であり、赤灰色を呈する。52は、口径11.4cm・器高4.6cmを測り、砂粒なく精選され、淡青灰色を呈す。焼成は良好である。53は、口径13.0cm・器高4.0cmで、精選された胎土で、精緻な焼きであり、壳灰色を呈する。51・52は赤焼き土器である。

**甕** 青海波叩き文をもつ胴部と口頸部破片を出土している。

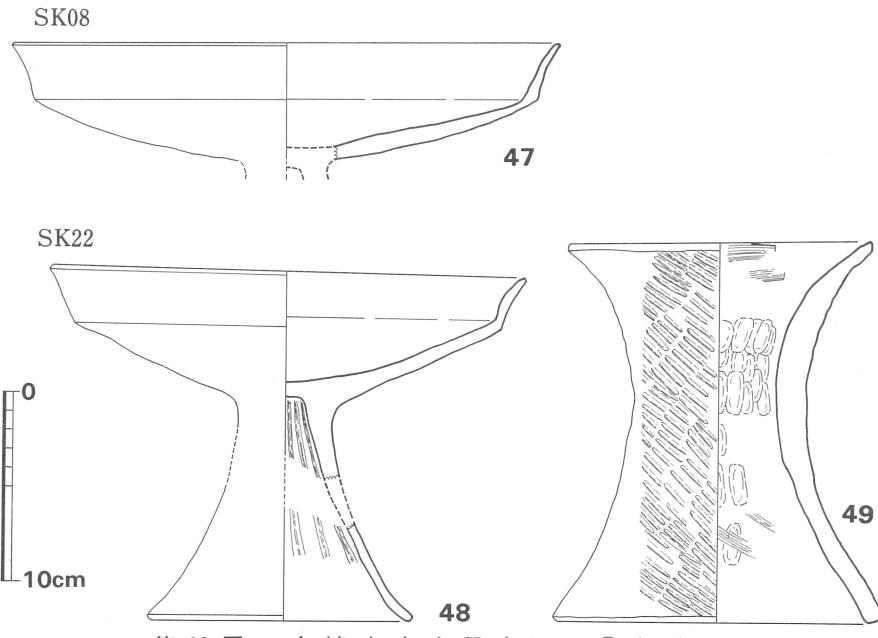
SK04出土土器の中で、53はIII A期・50・52はIII B期・51はIV期に比定できるように、比較的長期にわたる遺物が出土している。なお、SB04の土層は、舟底状を呈し、長期にわたって埋まったことがわかる。また、弥生土器の混入をあった。

## SB05・SB06

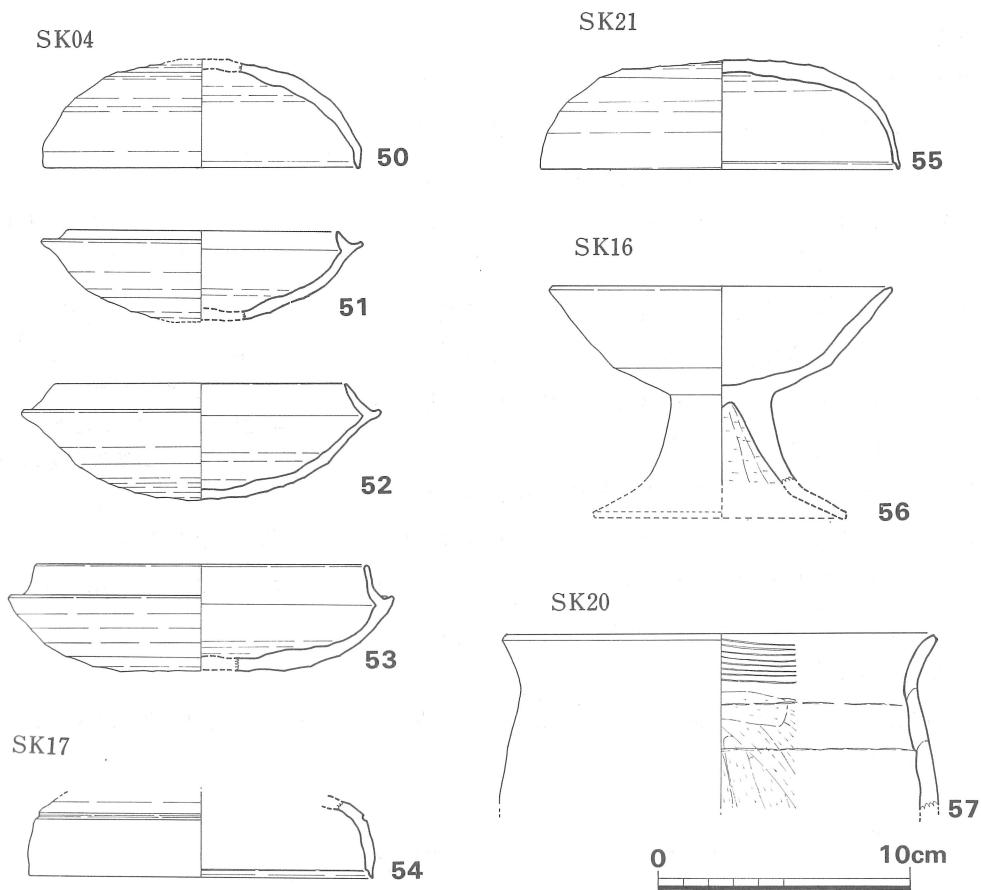
SB05には出土遺物はなかった。SB06は弥生土器の混入はあったが、時期を決定し得るものではない。



第21図 SK08出土  
土器実測図(1/2)



第22図 土 壤 出 土 土 器 実 測 図 ① (1/4)



第23図 土壌出土土器実測図②(1/3)

#### SK07

##### 弥生土器

**甕** 口縁部・胴部片を出土している。胴部にはハケ目調整・内面はナデている。

**高杯** 脚部を出土している。

出土遺物は、後期に比定できる。埋土には、中期の甕・高杯が混入していた。

#### SK08

##### 弥生土器（第21図46・第22図47）

**甕** 小形の甕を出土している。46は、現存高6.0cmを測り、口縁部・底部外面を欠損する。胴部内外面には、指頭痕による成形後、ナデている。砂粒を含む胎土で、淡黄灰色で呈し、やや軟質である。

**高杯** 床面より、杯部が1個体出土した。47は、口径29.0cm・現存高6.1cmを測る。杯部口縁

部は内面よりナデて、わずかに外反させている。砂粒を含むが、割合に精緻されている。淡黄灰色を呈する。

S K08出土土器は後期末を呈する。他に、中期の壺の胴部等を混入していた。

#### S K09

弥生後期を出土したが、実測でき得るものでない。

#### S K10

##### 須恵器

杯身 2個体分を出土している。

甕 脇部外面に格子目叩き文、内面に青海波叩き文をみる。

杯身等により、S K10はⅢ B 期に比定でき、埋土中には、弥生中期の甕の破片を混入していた。

#### S K11・S K12・S K13

S K11には出土遺物がなく、S K12・S K13は小片のみで時期等を決定できるものでない。

#### S K14

##### 土師器

甕 口縁部と把手を出土している。こしきと考えられるであろうが、底部の出土をみないのでは甕とした。把手は削り後、ナデている。

##### 須恵器

杯蓋 2個体の破片を出土している。

甕 脇部を出土しており、脇部内面に青海波叩き文をみる。

S K14出土土器は杯蓋等によりⅢ B 期に比定できる。なお、弥生中期・後期の土器破片を出土している。

#### S K15

小片が出土しているが、時期判断になりえない。

#### S K16

##### 土師器（第23図56）

高杯 1個体分出土し、脚部裾部を欠損している。56がそれで、口径13.3cmを測り、杯部は直線的に外反する。脚部内面にはヘラ削りをみる。器表には、杯部内外面・脚部外面に丹塗りが施されている。精選された胎土で、淡赤茶色を呈し、割合に良好な焼成である。

##### 須恵器

杯身 2個体を出土している。

甕 脇部片が出土している。

S K16出土土器は、杯身・甕によりⅢ B 期に比定できる。土師器・高杯はやや時期がのぼるようである。

## S K 17

### 須恵器（第23図54）

**杯蓋** 1個体出土している。54がそれで、口径13.3cmを測り、肩部に沈線を有する。若干砂粒を含む胎土で、淡青灰色を呈する。

S K 17出土土器はII B期に比定できよう。

## S K 18・S K 19

S K 18では、弥生後期の土器片を出土した。S K 19では出土遺物はなかった。

## S K 20

### 土師器（第23図57）

**甕** 2個体が出土している。57は、口径17.2cmを測る。口頸部は外反し、外面は横ナデ、内面にはハケ目が残る。胴部外面にはナデをみ、内面にはヘラ削りをみ、粘土紐輪づみ痕をヘラ削りの部分に認める。

### 須恵器

**杯身** 1個体分出土している。

須恵器によりS K 20はIII B期と比定でき、埋土中には、弥生中期の土器を混入していた。

## S K 21

### 須恵器（第23図55）

**杯蓋** 55の1個体を出土している。口径14.0cm・器高4.3cmを測り、口唇部に段を有する。精選された胎土で、茶色味のある青灰色を呈する。焼成は良好である。

S K 21出土土器はIII A期に比定できる。

## S K 22

### 弥生土器（第22図48・49）

**壺** 底部片が2個体分出土している。

**高杯** 48の1個体分出土している。口径25.3cm・底径14.1cm・復元器高18.3cmを測り、器表は剥落のため不明である。脚部内面にはシボリ痕をみる。石英質砂粒を含む胎土で、黄灰色を呈する。

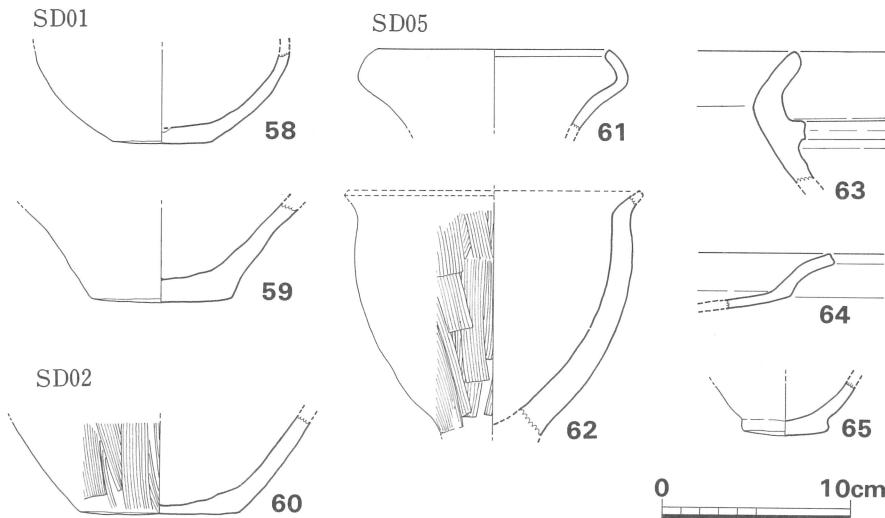
**器台** 49が出土している。口径16.1cm・底径17.4cm・器高20.0cmを測る。外面には平行叩き文をみる。内面上部には横方向ハケ目の後ナデをみ、中部には指頭痕がのこり、下部は、指頭痕成形後、ハケ目を施し、ナデている。

S K 22は後期末と比定できよう。

## 溝内出土土器

## S D 01

### 弥生土器（第24図58・59）



第24図 溝出土土器実測図(1/4)

**壺** 58は、底径5.2cmで、底部から胴部にかけて現存する。器表の外面は研磨的手法で調整され、内面からナデ調整がみられる。砂粒を含んだ胎土で、茶灰色で、やや軟質である。他に、2個体分の底部・胴部等を出土している。

**甕** 59は、底径7.4cmを測り、器表内外面にはナデ調整がみられる。(ただし、59も壺・底部の可能性がある。)

S D01出土土器は後期初頭に位置づけられよう。

#### S D02

##### 弥生土器 (第24図60)

**壺** 60は、底径8.2cmを測り、器表外面にハケ目をみ、内面にはナデを見る。砂粒をあまり含まない胎土で、暗赤茶色を呈し、割合に良好な焼きである。外底部には簾状圧痕を見る。

他に、甕等を出土しているが、小片である。S D02出土土器は後期初頭～前半に比定できる。

#### S D03・S D04

S D03出土土器は弥生後期初頭に比定でき、S D04は後期に比定できる。

#### S D05

##### 弥生土器 (第24図61～65)

**壺** 61は、口径12.0cmで、器表は剥落していて、砂粒を含まない胎土で、茶黄色を呈する。

**甕** 62は、口縁部・底部を欠損するもので、胴部外面にはハケ目をみ、内面にはナデを見る。63は大型の甕である。

**高杯** 杯部の口縁の破片を出土した。

S D05は後期に比定できる弥生土器が出土したが、割合に長時期にわたっている。

### S D 08

弥生後期に比定できる土器が出土している。

### S D 09

弥生後期初頭に比定できよう。

### S D 13

弥生後期に比定できる。

### S D 06・07・10・11・12

弥生土器片は出土するが、時期を決定できうるものでない。

## 不明遺構出土土器

### S X 01

#### 弥生土器

後期に比定できる壺・甕の破片が出土した。

#### 土師器

甕 コシキの口縁部が出土している。

#### 須恵器（第26図70）

杯身 70が出土している。口径11.0cm・器高4.2cmで、砂粒を含まない胎土で、黄灰色を呈し、軟質である。

甕 器表外面に格子状叩き文、内面に青海波叩き文をみる。

S X 01出土土器はIII B 期に比定できる。

### S X 02

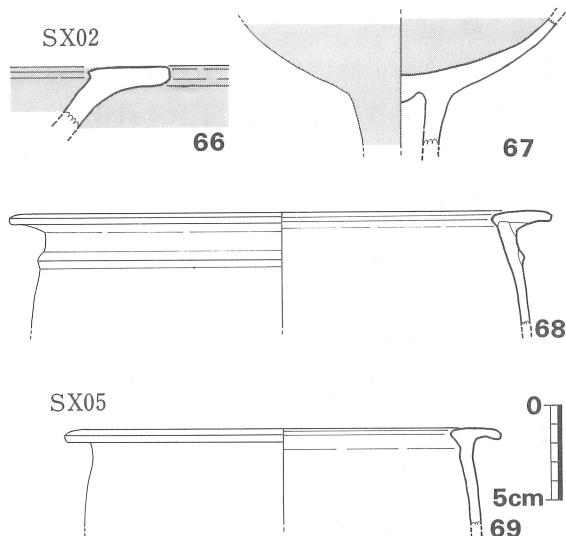
#### 弥生土器（第25図66～68）

壺 66の鋤先口縁の壺である。器表内外面に丹塗りが施されている。

甕 68が出土している。口径28.7cmを測り、口縁部下に三角突帯を帖付つけている。割合に精選された胎土で、褐色を呈する。

高杯 67が出土している。器表には丹塗りが施され、脚部には縦方向のヘラミガキをみる。精選された胎土で、黄灰色を呈し、良好な焼きである。

#### 須恵器（第26図71～74）



第25図 不明遺構出土土器実測図① (1/4)

**杯身** 71～73が出土している。71は口径10.8cm・器高4.7cmを測り,砂粒なく,堅緻な焼きである。72は口径11.4cm・器高4.3cmを測り,精選された胎土で,暗黒灰色を呈し,精緻な焼成である。73は受部径14.1cmを測る。胎土等は比較的良好である。

**高杯** 74は出土している。脚部に透孔を有する。底径10.8cmを測る。

**土師器** (第26図75)

**甕** 口縁部は横ナデ・内面はヘラ削りをみる75を出土している。

以上の須恵器・土師器より, III B期に比定できよう。

#### S X 03

**須恵器** (第26図76・77)

**杯蓋** 76が出土している。口径13.0cm・器高4.15cmを測り,肩部に段を有する。割合に精選された胎土で,堅緻で良好である。

**杯身** 77が出土し,口径11.0cm・器高3.8cmを測り,精選された胎土で,精緻な焼きである。

S X 03出土土器はIII B期に比定できる。

#### S X 05

**弥生土器** (第25図69)

**甕** 口径23.2cmを測り,精選された胎土で,黄灰色を呈する。69がそれである。

**須恵器** (第26図78)

**杯身** 78が出土し,口径11.1cmで,受部と立上り部で接合されている。胎土等は良好である。

S X 05出土土器には弥生中期中頃・III B期の遺物を含んでいた。

#### S X 06

須恵器の杯蓋・杯身を各1個・甕を2個体分出土した。III B期に比定できるようである。

#### S X 07

須恵器の杯身2個・甕の胴部片を出土し,III B期に比定できよう。

#### S X 08

**土師器**

**甕** 口縁部が出土した。

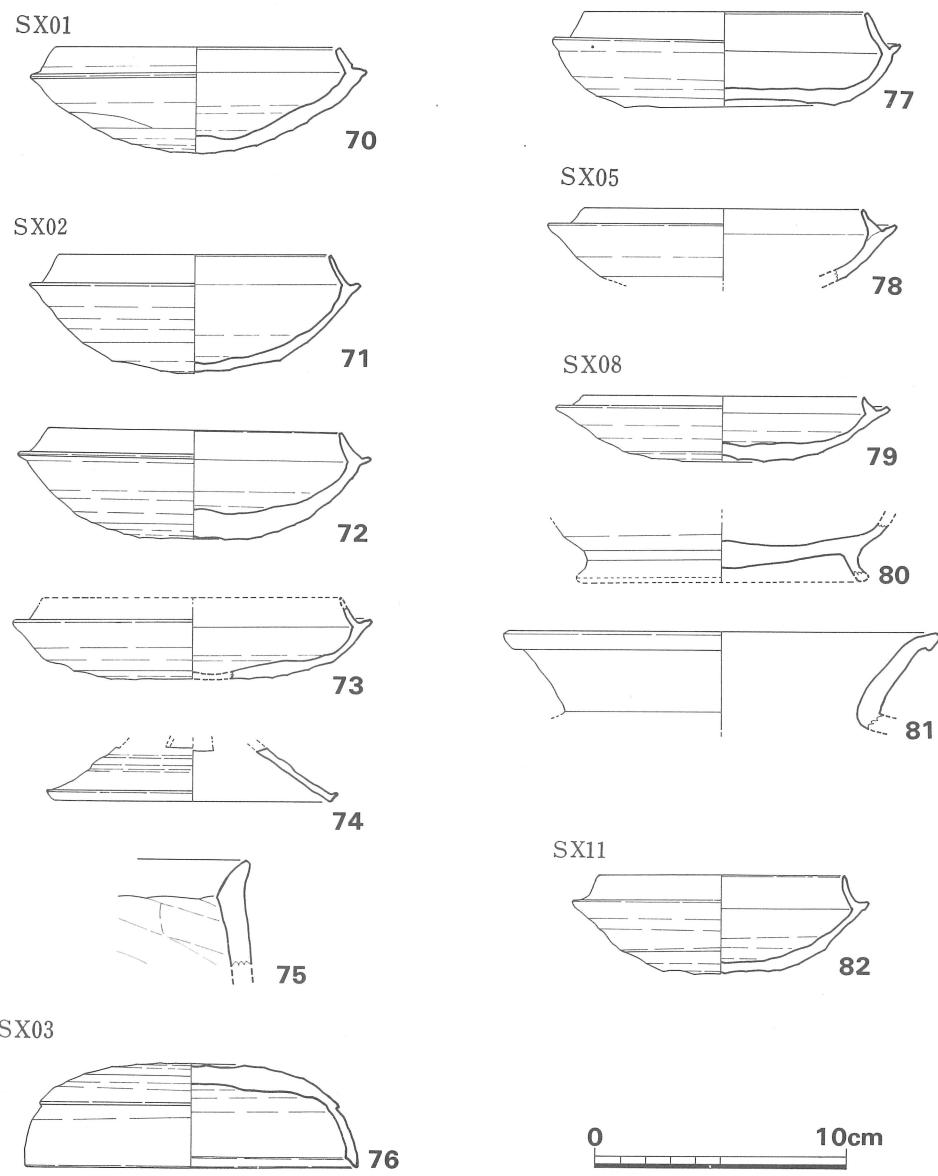
**須恵器** (第26図79～81)

**杯身** 4個体出土している。79は口径11.1cm・器高2.6cmで,砂粒を含まない胎土であるが,ややあまい焼成である。80は,高台を有し,外底部はヘラ削りされている。

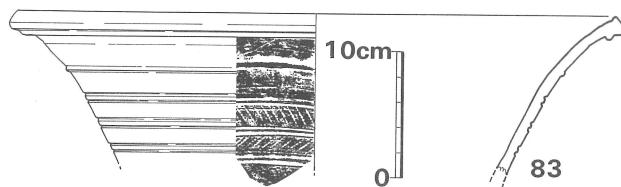
**甕** 81が出土している。口径17.0cmを測り,口頸部には横ナデをみる。

S X 08出土土器で,78はIII B期・80はVI期に比定できよう。他に,弥生土器の破片をも出土し,混入していると考えられる。

#### S X 09

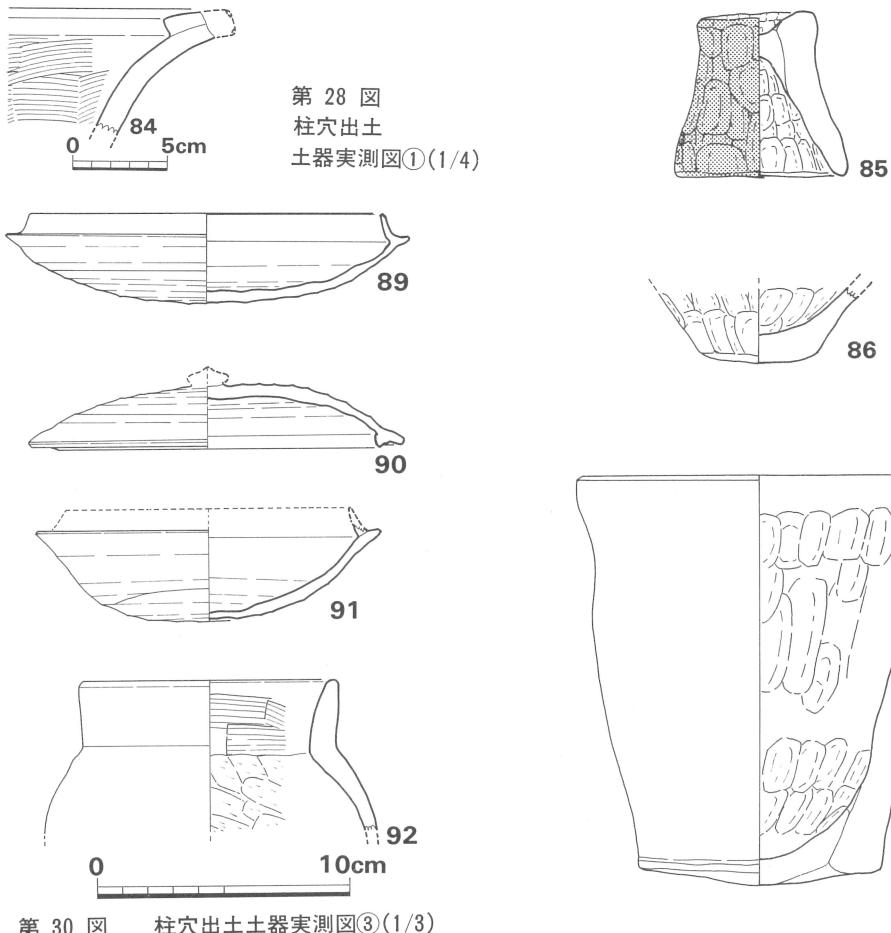


第 26 図 不明 遺構 出土 土器 実測図 ② (1/3)



第 27 図 SX14 出土 土器 実測図 (1/6)

弥生土器・土師器・須恵器を混入して出土している。須恵器は、III B 期であり、杯蓋・杯身等が出土した。



第 30 図 柱穴出土土器実測図③(1/3)

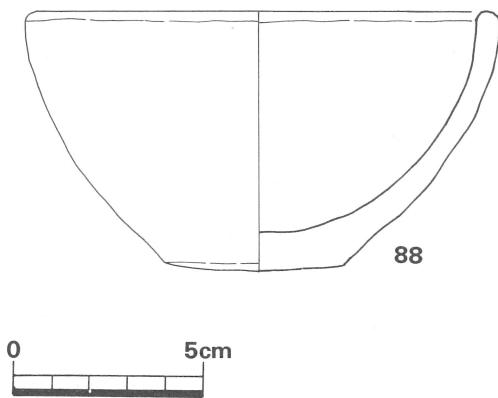
S X 10

須恵器の杯身 2 個体を出土し、III B 期に比定できよう。

S X 11

須恵器 (第26図82)

杯身 82が出土している。口径9.8cm・器高3.9cmを測り、割合に精選された胎土で、精緻で良好である。やや小型であるが、口縁部立上り等はIII A 期に比定できる。



第 29 図 柱穴出土土器実測図② (1/2)

## S X 14

### 須恵器 (第27図83)

**甕** 83が出土した。口径47.0cmを測る。口頸部に三角突帯・6条の沈線を施こし、沈線間に櫛目状工具の突刺文を施文している。胴部外面には格子目状叩き文をみ、内面に青海波叩き文を見る。

## S X 04・S X 12・S X 13

この3基の遺構では土器は出土しなかった。

### 柱穴内出土土器

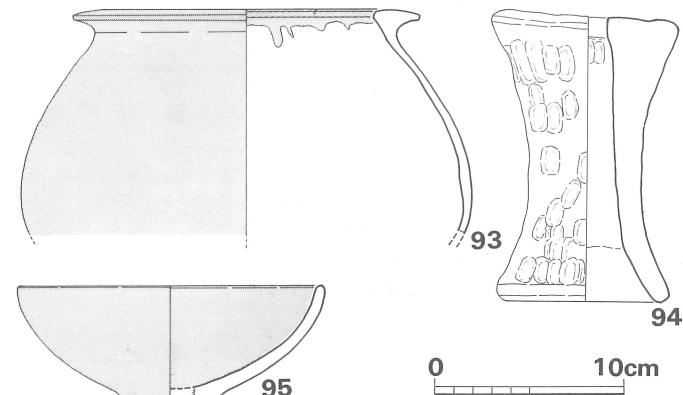
#### 弥生土器 (第28・29図)

84は、弥生前期末の大甕である。口縁部は貼付けられ、器表外面には研摩をみ、内面にはハケ目をみる。S:80; E:25地区の柱穴出土である。85は、小型の器台である。器高4.4cmを測るもので完形品である。器表外面には指頭痕をみ、胎土等は良好である。86は、小型の鉢であろう。指頭痕による成形である。S:40; E:10地区内柱穴出土である。87は、小型の甕で、口径9.6cm・底径6.3cm・器高10.85cmを測り、器表外面にはみがきをみ、内面には指頭痕の成形をみる。S:50; E:20地区

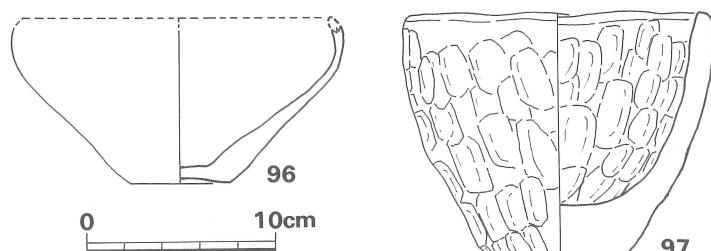
内柱穴出土である。88は、小型の鉢で、口径12.4cm・底径4.8cm・器高6.9cmを測り、器表はナデをみる。胎土等は良好で、S:55; E:20地区内柱穴出土である。

#### 須恵器 (第30図89~91)

89は、口径14.0cm・器高3.6cmを測り、胎土には砂粒を含むが良好であり、堅緻である。S:40; E:10地区柱穴出土内である。90は、鉢を欠損する杯蓋で、口径12.6cmを測る。胎土は良好であるが、ややあまい焼成であ



第31図 S35:E05地区2層出土土器実測図①(1/4)



第32図 S35:E05地区2層出土土器実測図②(1/2)

る。S : 40 ; E : 15  
地区内柱穴出土である。91は立上りを欠損する杯身であり、  
受部径13.6cmを測る。  
胎土等は良好である。  
S : 55 ; E : 10地区  
内柱穴出土である。

#### 土師器(第30図92)

92は口頸部が直線的に立上る壺である。  
器表外面は剥落している。  
内面は口縁部にハケ目をみ、胴部にヘラ削りをみる。

S : 30 ; E : 20地区  
内柱穴出土である。

S : 35 ; E : 05地区

#### 2・3層出土土器

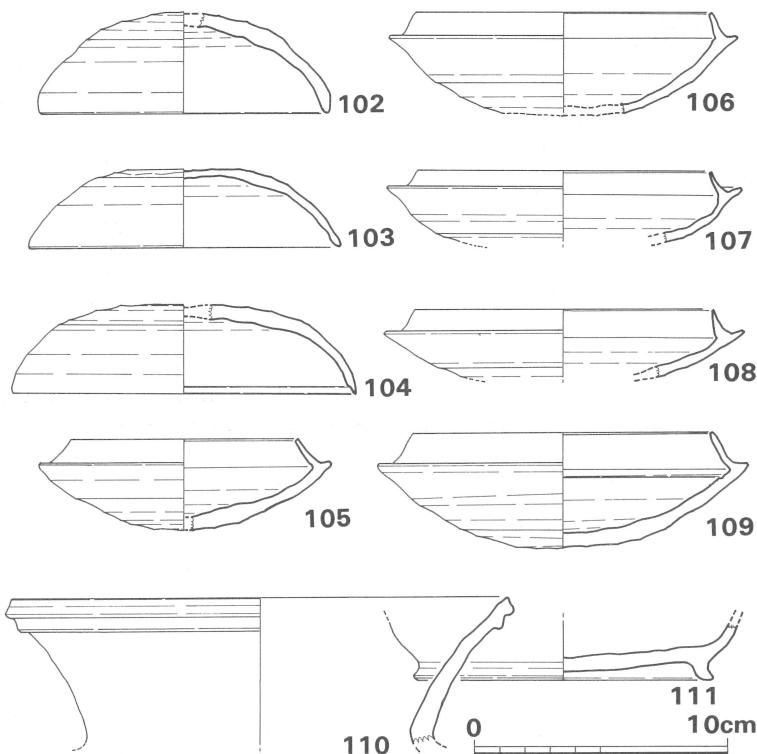
##### 弥生土器(第31・32図)

96は小型の鉢で、底  
径2.7cmを測り、胎土等  
は良好である。97は小  
型の鉢で、口径8.0cm・  
底径3.7cm・器高6.5cm  
で、器表には指頭痕の  
成形をみる。胎土等は

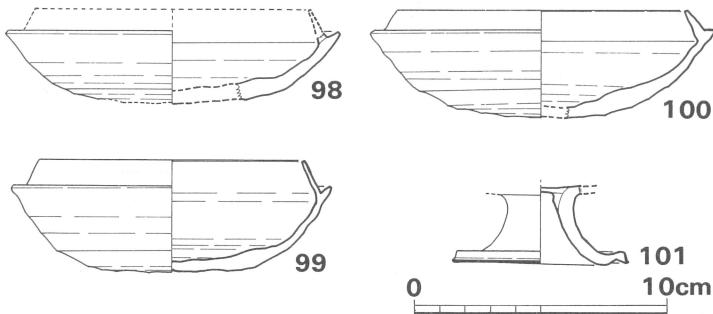
良好である。93は短頸壺で、器表外面等に丹塗りをみる。口径18.3cmを測る。94は器台で、口  
径9.9cm・底径9.1cm・器高15.0cmを測り、器表外面に指頭痕の成形をみる。95は鉢で、口径16.3・  
底径4.8cm・器高6.0cmを測り、器表に丹塗りを施す。93～97は2層出土である。

#### 須恵器

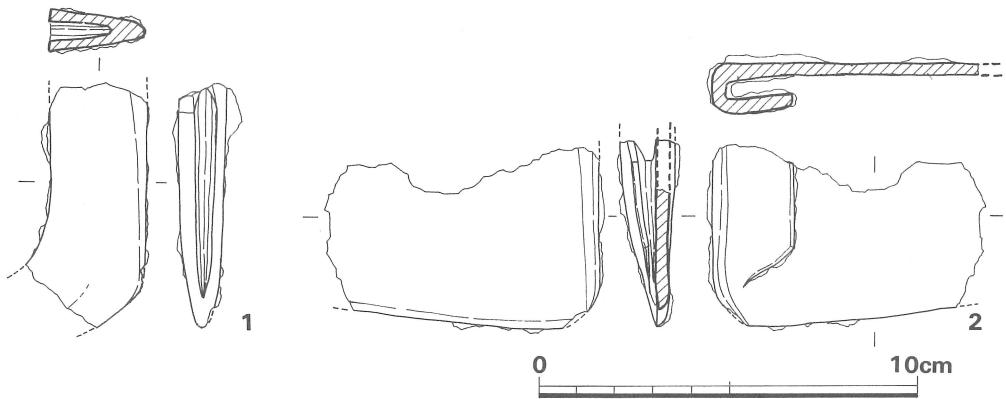
98～100は杯身で、口径10.5～11.3cm・器高4.3～4.5cmを測る。100はややあまい焼成であり、98



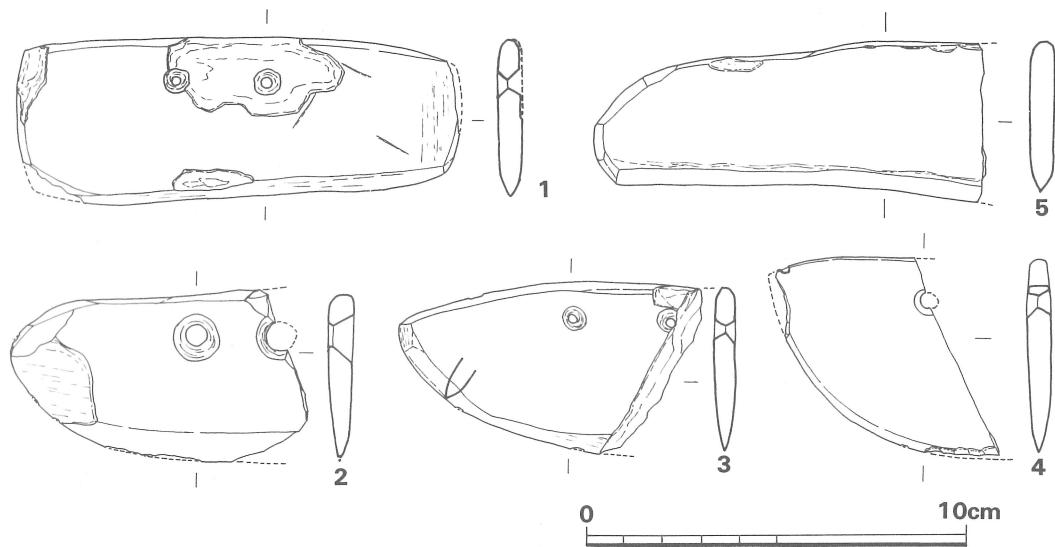
第33図 S35;E05地区3層出土土器実測図 (1/3)



第34図 S30;E05;S35;E05地区2層出土土器実測図① (1/3)



第35図 鉄鋤先・鉄鎌先実測図(1/2)



第36図 石包丁・石鎌実測図(1/2)

・99は胎土等は良好である。99はやや古式を呈する。101は高杯脚部で、底径7.0cmを測る。98～101は2層出土である。

102～104は杯蓋で、口径11.3～13.4cm・器高3.1～4.0cmであり、103は赤焼き土器である。105～109は杯身で、口径9.0～11.8cm・器高3.6～4.1cmを測り、109はややあまい焼成である。110は口径19.6cmで、横ナテ調整である。111は高台をもち、底径11.8cmを測る。ややあまい焼成である。

以上の102～111は3層出土である。

#### 農工具

鉄鋤先(第35図1)

S B 10の床面より出土した。鋤先の片側のみで、鋤の刃部等は欠損している。最も厚い部分は、12mmである。木質部は残っていない。

#### 鉄鋤先（第35図2）

S B 03の床面出土である。片側の折曲げ部と刃部が現存している。厚さは3.5mmで、折曲げ部は14mm前後であり、木質部は残っていなかった。

#### 石包丁（第36図1～4）

1は、S : 20 ; E : 05地区の3層出土である。側面部がわずかに欠損するが、ほぼ完形品である。輝緑凝灰岩製である。2は、S : 40 ; E : 05 3層出土であり、ほぼ半分現存する。かなり使用されたものらしく、若干、風化しているようである。輝緑凝灰岩製である。3は、S B 29出土であり、ほぼ半分現存する。刃部はわずかに欠けている。輝緑凝灰岩製である。4は、S B 43埋土上層出土であるが、住居跡に伴わないものであろう。輝緑凝灰岩製である。

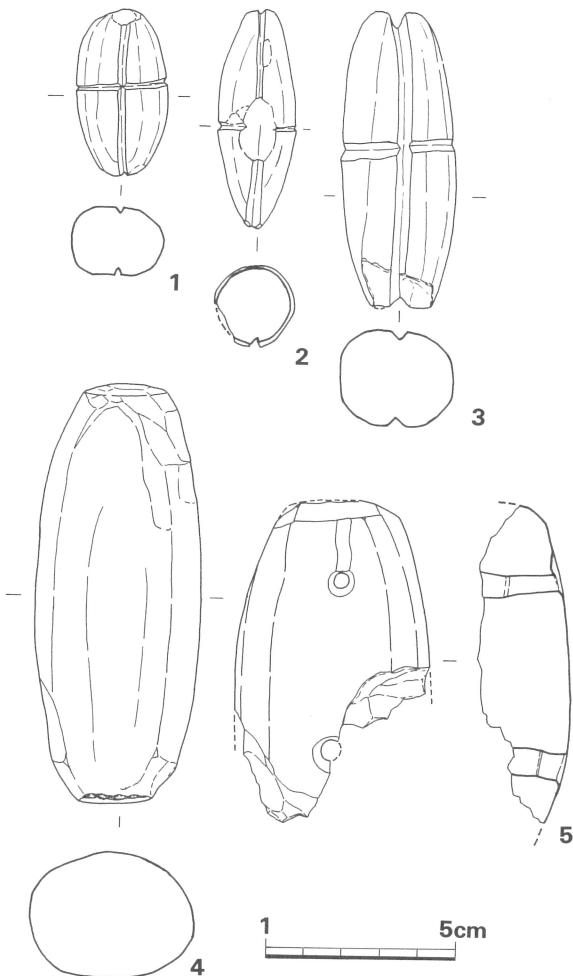
#### 石鎌（第36図5）

S : 15 ; E : 10地区2層出土である。基部を欠損し、鎌の刃部先は研かれている。頁岩質であろう。

### 漁具

#### 石錐（第37図）

1は、S : 55 ; E : 15地区3層出土で、十字に溝を施している。滑石製である。2は、S B 18埋土中出土であり、1と同様に溝を有する。滑石製である。3は、S : 35 ; E : 05地区3層出土で、一部を欠損する。十字に溝を有し、滑石製である。4はS D 06出土で、両端に平担部をみる。硬質の砂岩質で、完形品では2個の孔をもつものであろう。5は、S : 40 ; E : 15地



第37図 石錐実測図(1/2)

## IV まとめ

上罐子遺跡群は、今回の第3次調査と第1・2次調査との検出遺構を合せると、住居跡 102軒・掘立柱建物 5軒・柵列（柱穴列）2条・土壙22基・溝15条の生活遺構、土壙墓 2基・方形溝状遺構 1基の埋葬遺構、不明遺構14ヶ所を検出したことになる。<sup>(註1)</sup>

以上の調査結果にもとづいて、若干の問題点を記述する。

### 住居跡の時期と立地について

第3次調査では、42軒の住居跡が弥生時代後期初頭から後半までに比定でき、25軒の住居跡は小田富士雄氏須恵器編年のIII A期～III B期にできよう。古墳時代前期・中期の住居跡が調査によって検出していないが、この時期の住居跡は他の丘陵に存在していると考えられる。なお注意すべきことは、伊都国を中心的な遺跡である三雲遺跡群では、布留期に比定できる住居跡<sup>(註2)</sup>がほとんど焼け、住居跡建材が炭化して検出していることであり、「倭國大乱」の歴史的記述と結びつけられないでもないが、上罐子遺跡群では、弥生時代後期後半の住居跡が焼けてないので、前述したように他の丘陵等の立地等の要因を考えなければならないであろう。

次に、住居跡を時期毎に考えてみたい（第41・42図）。

弥生時代初頭では、調査区内で、比較的北側に立地している。また、若干の住居跡の重複はあるが、ほぼ3群または4群に分れるようである。

後期前半では、1群を除けば、初頭の群をほぼ踏襲して、2群または3群に分れ、立地している。

後期中頃では、前半の群を1つ踏習し、1軒が立地し、別の地区に1軒が立地して、2群に分れる。

後期後半では、初頭から中頃までの4群または5群の中での3群に、それぞれ1軒ずつ分れ、立地している。

このように、平面的に弥生時代住居跡の立地等をみれば、4群または5群に分れる。このことは、共同体、集合等を考えられようが、調査地が丘陵斜面であることや生産遺構・埋葬遺構が不明確であることから、平面的な群の指摘に留めておきたい。

古墳時代の住居跡では、III A期・III A～III B期とIII B期の2期に住居跡を区別して、その立地をみてみたが、比較的広範囲に立地して、群として把えることは不可能である。

さらに、弥生時代の住居跡は比較的北側に立地していることは、水田などの生産遺構が北側の丘陵間にある低湿地にもとめることができよう。古墳時代の場合は、住居跡が広範囲に立地することから、生産遺構等は南側・西側の低湿地にもとめることができよう。なお、北・南・西の3方向の低湿地は現在水田として利用されている。



弥生時代後期初頭期の住居跡

0 15m



弥生時代後期前半期の住居跡

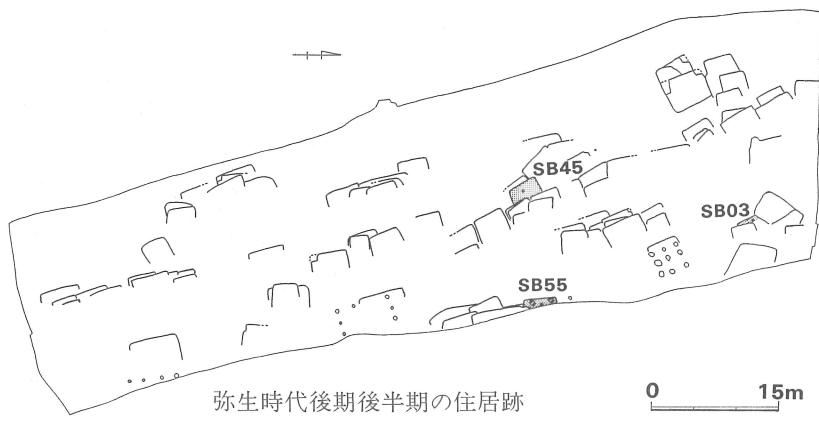
0 15m



弥生時代後期後半期の住居跡

0 15m

第41図 住居跡時期別配置図① (1/900)



弥生時代後期後半期の住居跡

0 15m



古墳時代III A・III A～III B期の住居跡

0 15m



古墳時代III B期の住居跡

0 15m

第42図 住居跡時期別配置図② (1/900)

## 弥生時代住居跡の形態について

弥生時代の住居跡は、 S B 05・S B 33・S B 45・S B 59 b・S B 60・S B 88などに代表されるように、底面に周溝を有し、4本と推定される主柱穴をもっている。また、炉と考えられる焼土も検出している。S B 88の周溝にみられるように、小柱穴を検出しているが、住居跡壁面の土留めの支柱穴と考えられる。また、周溝を有しない住居跡も存在する。

## 古墳時代住居跡の形態について

S B 86・S B 94・S B 95に代表されるように、古墳時代の住居跡では、床面に3個の柱穴を検出しているが、本来は、2間×2間あるいは、2間×1間の主柱穴をもつ住居跡であろう。また、この遺跡群では、この時期の住居跡にみるべきカマドを1軒も検出していない。このことは、次のような理由によるものであろう。遺跡の立地が丘陵の東側斜面であり、ほとんどの住居跡が東側を流失または削平をしている。さらに、年間の中で、比較的西方向からの風が吹き、特に冬などは異さらである。よって、西方向からの風を考慮すれば、カマドは住居跡の東壁に付設されていたであろうと考えている。

## 溝と住居跡との関係について

13条検出した溝の中で、S D 04・S D 05は弥生時代後期に比定でき、S D 04はあたかもS B 04を取り囲むようにめぐっている。S D 05は他に概当する住居跡もあろうが、S B 29を取り囲んでいるようである。このような平面的な関係から、溝は、住居跡への雨水などの流入をふせぐための排水溝であると考える。なお、第1・2次調査でも検出されている。

## 掘立柱建物について

3軒の掘立柱建物を第3次調査で検出し、第1・2次調査分とあわせると5軒を調査したことになる。<sup>(註3)</sup>最近、この掘立柱建物を居住用建物としてとらえようとしているが、<sup>(註4)</sup>石野氏の指摘もあるように、遺物が少ないという現状で、また、当遺跡群のように調査区が制限されている場合、周辺の調査も不可能である。なお、3軒の掘立柱建物の時期決定できる遺物は出土しなかった。

## 砥石・工作台を有する住居跡について

弥生時代住居跡の中で砥石を出土したものは、S B 11 a・S B 39・S B 44であり、工作台と推定される磚石を据えていたものは、S B 27・S B 39である。また、鉄器農工具を出土した住居跡はS B 03・S B 10である。砥石は鉄製工具を砥ぐことを用途とし、工作台はその修理等に使用したと考えることができよう。以上のようなことを考えれば、砥石・工作台をもつ住居跡は鉄器を所有していたであろう。とすれば、鉄器・砥石・工作台を有した住居跡は、弥生時代住居跡で比較すれば、15%強ということになる。これは、今後、資料の増加を持ち、考えなければならないことであろう。特に、弥生時代の中で渡来文化の影響を受けた当地方では。

## 赤焼き土器について

所謂、赤焼き土器とされている赤茶色等を呈し、土器製作の調整等は須恵器であるものが、当遺跡群でも数点出土している。杯・甕であり、時期はⅢ A 期～Ⅲ B 期である。この赤焼き土器については、他に遺跡出土品を実見し、考えてみたい。

最後に、上罐子遺跡群第3次調査に従事されました方々には、西からの・北からの寒風のものにもかかわらず、ご協力いただいたことに感謝いたします。また、株式会社九州住宅流通サービスのご協力に深甚の謝意を表わします。

- 註1 第1・2次調査では、図面によると他に数条の溝を検出・調査されているが、除外した。
- 2 柳田康雄編『井原・三雲遺跡発掘調査概報・昭和49年度』 福岡県教育委員会 1975  
同 編『 同 上 · 昭和50年度』 福岡県教育委員会 1976  
同 編『三雲遺蹟I』 福岡県教育委員会 1980
- 3 島取県青木遺跡の報文中などに報告されている
- 4 石野博信「掘立柱建物跡の調査」『古代学研究・92号』 古代学研究会 1980